

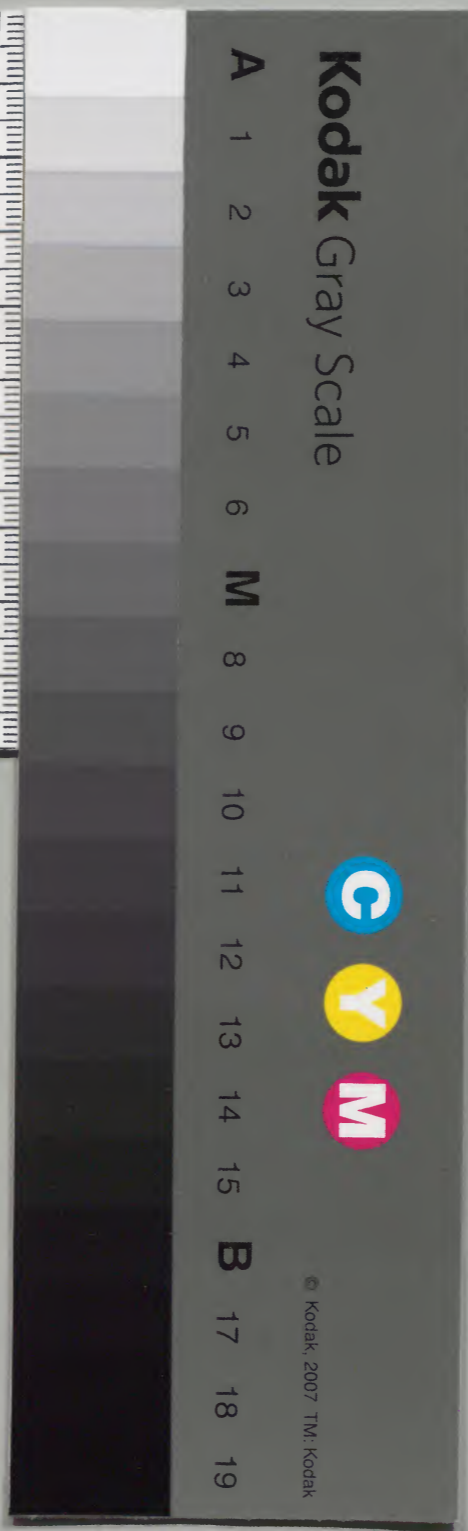
茅窓漫録

下

			一八六三	和書門
	二架	二函	二冊	
			號	類

庫	文	閣	内	
二架			一八六三	和書
六冊	二冊		號	類

内閣文庫	
番號	和 18863
冊數	2 (2)
函號	213 82





日茅憲漫錄下卷

目錄

四百餘州

革命紀元

封字

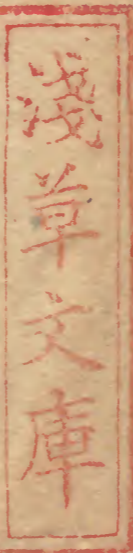
大職冠像并印

織工

中神金神

火車

芥子園畫傳卷一之卷



烟草

紫色

疫神

天降異物并月桂

神農祭并醫祖神

庭忌草

飛鳥寺銘并三化由來

入車

中轉金針

大島屋敷

快子

草子

四百餘州

辨

辨

辨

辨

辨

辨

辨

茅窓漫録下

中國 茅原定著

四百餘州

○日本とて漢土をさうして四百餘州といふは古今の人よく知る

所少く明は萬曆十九年大岡秀吉公彼土へ答は書小一超

直入大明國易吾朝風俗於四百餘州施帝都政化于億

萬斯年者在方寸中松下見林が異稱さしとて漢土の書小

四百餘州といふは多く見ゆて何まの頃よりい傳

ふりや

茅窓漫録下

圖書編 第八十三 臣博考前古若光武中興監前世官冗之弊裁省天下四百州縣官止七千五百餘員額類極少者也

便明全書云光武中興乃併省郡國十縣道侯國四百餘所

呂東萊紫微詩話云李芳州贈汝州太守詩安得吾皇

四百州皆如此邦二千石

水滸傳首卷云一條捍棒等身齊打四百軍州都姓趙

此等の書小撮といひ傳ふや東見記小千歳寶掌和尚の

詩を引く行盡支那四百州此中偏稱道人遊ととんど

彼土を四百餘ありと事歴代純正史小とせば

とる後か

烟草

○烟草のゆゑ近年刊行なり一蒿録よ委々載ふれど諸人乃よく志ふ所なり別名多く諸書より見えたり此邦傳來はるも数多説あり考へると左小志に

烟草

本草備要
本草彙言
本草洞詮
食物本草
本經逢原

錦囊秘錄
物理小識
物庵雜記
在國雜志
食物本草會纂

烟葉

博學彙言
肇慶府志
格物志

烟花

秘傳花鏡

烟氣

醫意商

烟酒

本草紀言
聞見卮言
奇園奇所奇

本草綱目卷之二十一

本草綱目卷之九

建烟 行厨集
嘔烟 願體集
魂烟 本草會纂

蕪 行厨集
芸 景岳全書
酒草 博學彙言
仙草

怡曝 堂集
蓋露 食物本草
露酒 聞見卮言
余糖 姚旅 露書

髮絲 上同
返魂烟 秘傳花鏡
返魂草 本草彙言
書隱叢說

南靈草 芝峰類說
綠南草 上同
金絲草 物理小識

金絲烟 芝峰類說
金絲醺 姚旅 露書
金絲薰 香祖筆記

淡肉果 物理小識
淡巴菰 香祖筆記
淡芭菰

漳州府志
淡把姑 物理小識
相思草 本草備要
餐

香如栢 怡曝堂集

漢土此書に載せしものと見ゆ大抵皆此草呂宋國に生ず
ふなりと然るより割延璣が在國雜誌に聞外人相傳高

本草綱目録下之卷

四

麗國子妃死王哭之慟夢妃告国塚生一草名曰煙草
采之焙乾以火燃之而吸其煙則可共悲亦忘憂之類也王
如言采得遂傳其種此說奇袁棟が書隱叢說の
相思草一名略之好之可以破寂助氣無大利亦無大害前世未
聞焉相傳起於明末今已十室而九無論朝野雅俗良賤且
波及閨閤矣用之者若刻不能忘即間窓弄墨與夫工作
及勤劬者同飲食之不須臾離焉豈習俗使然耶抑天道使然
耶此說雅

此邦傳來の諸說數多の正據難一本
朝食鑑云烟草素自南蠻國來移種子本邦不過六七十

中初番船商夫卷葉作筒如筆策狀吹火夾廣處吸狹處
則煙滿口欲吞其煙暫住喉中而吹出口及鼻孔令胸膈以通利
冷氣以舒暢而得一時之快故長崎商客爭效者如流人人吸
之不經年月而九州同翫之後蠻國傳吸管此号幾世流

世事談及其蝟老人が翁草より慶長十年始と南蠻国と種
と傳と長崎櫻の馬場と栲ふ其後山州花山と作ると山多葉
粉とよ其和列吉野と作と相續と丹波と栲え次第と諸国へ
廣まりと奥州四家合考小頃年夷狄に傳來と烟草とよ
物諸人好と是と吸は是年

ハ慶長十年と指ヤリ慶長日記十二年に記此此
タバコと名物時行南蠻国より渡ふと記セリ

後水尾帝御製

藻塩焼海人なつてのいふと烟草かゝる人のあつたこと

なり

りまらふ諸人乃好むりて元和三年六月廿八日天下一統の制

禁あり

武徳編年よ元和二年十月烟草益制禁留は彼草と作ふの過

錢百文宛出すべしけしとと竊は吸者あり罪人多きとて

程ちうく宥免あり最初ハ幾世流とて小た竹の節を留め

火皿の大サ小作り筆の軸小似たれ物と横よはけ其烟と吸

ちり又紙り巻と吞つてのありと見えく羅山文集

小佐波古草名採之乾暴剋其葉而貼于紙捲之吸其烟

といへ其後黄銅は幾世流出來つる時と自身ふる所お

きび家ふふいふおき人の來る時取出し請取渡の禮あり

年々流行とて随ひ次第小増長し人々其法の廢るの

勿體なれ白銀黄銅の國貨を以て烟器と作る或錦繡

綾羅斑毛皮草の文物を以て草具と製し其弊年々いふ

りのかり然るも此物元來毒草なり人小益たり性辛烈

みく無病小津を生じ津ハ身の液なり潤養せむ

反て枯竭とて損はるる畢竟少く擗と閑の能

りぬの本草備要一飽則易饑饑則飽と載る黄蘗は隱

元禪師烟草と惡の偈一管狼烟吞復吐恰如炎口鬼

神身當年鹿苑有此草不說五辛說六辛漢人是也惡之

夏諸本草小多く見え大抵上小出別名と載る本草皆悪り蔣王吉か醫意南ハ殊ハ甚く

邦も次第流行と多くの田畑と費し金銀銅鐵ハ勿

論錦繡綾羅斑毛皮革の類國家の貨物と消鑠とはしり

廣大なり蠻人最初けしハ土とくく烟管を長く作客來

乃時取出し一服毎小吸口と折り又他の人は渡とあり清は

渡の禮あり漢人と大抵右のあらくく禮式ありハ僊卓燕式紀小

室曆辛巳刻清人吳成克が長崎みくく叙席烟筒ハ烟草とはきぎ

山西金右衛と船中了郷養せし筆記叙席烟筒ハ烟草とはきぎ

と出と管の長ハ凡ハ四尺許管の長きと馳走とと芬盤火盤

烟袋ハ類ともくびる人ハ火刀とつくく火をくく黄笈ふく

喫とししりハ當時も最初異國傳來乃法と失ひ人ハ烟器

と所持し款酬ハ禮なく不遜鄙野乃態ハつくるりなり

あらはは太平の化り乘ど人氣高上各ハ好事小耽貴賤一統

奇とあのむれ風となり異國蠻夷乃品物國益なるハ也と

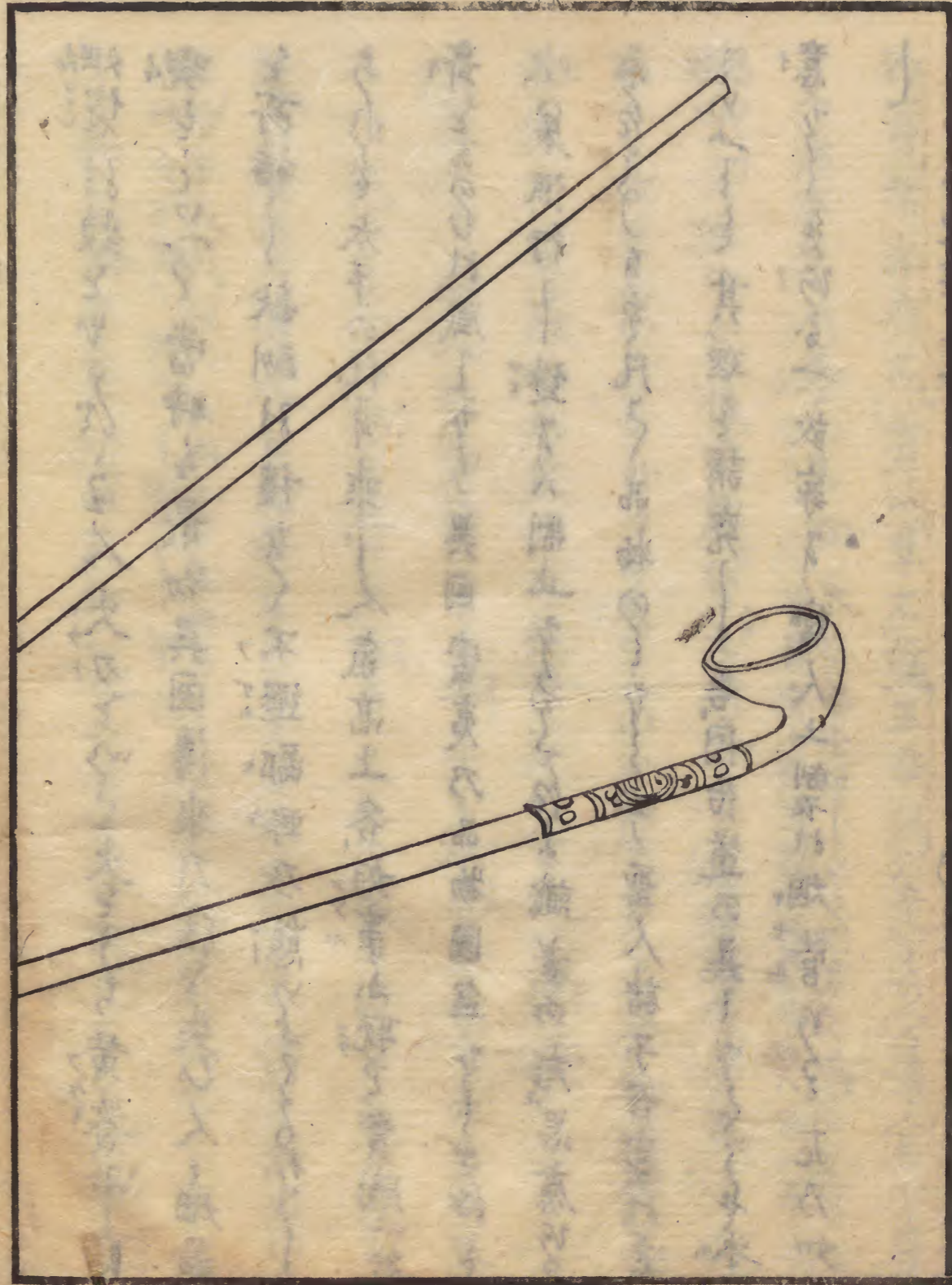
次第派行ハ遂ニハ制止をりる識者の尤思慮あり

をたらしむる凡く品物のもくハノ聖人諸子百家は也

としりも其理を講究し吾國治道の具ハ也と也本

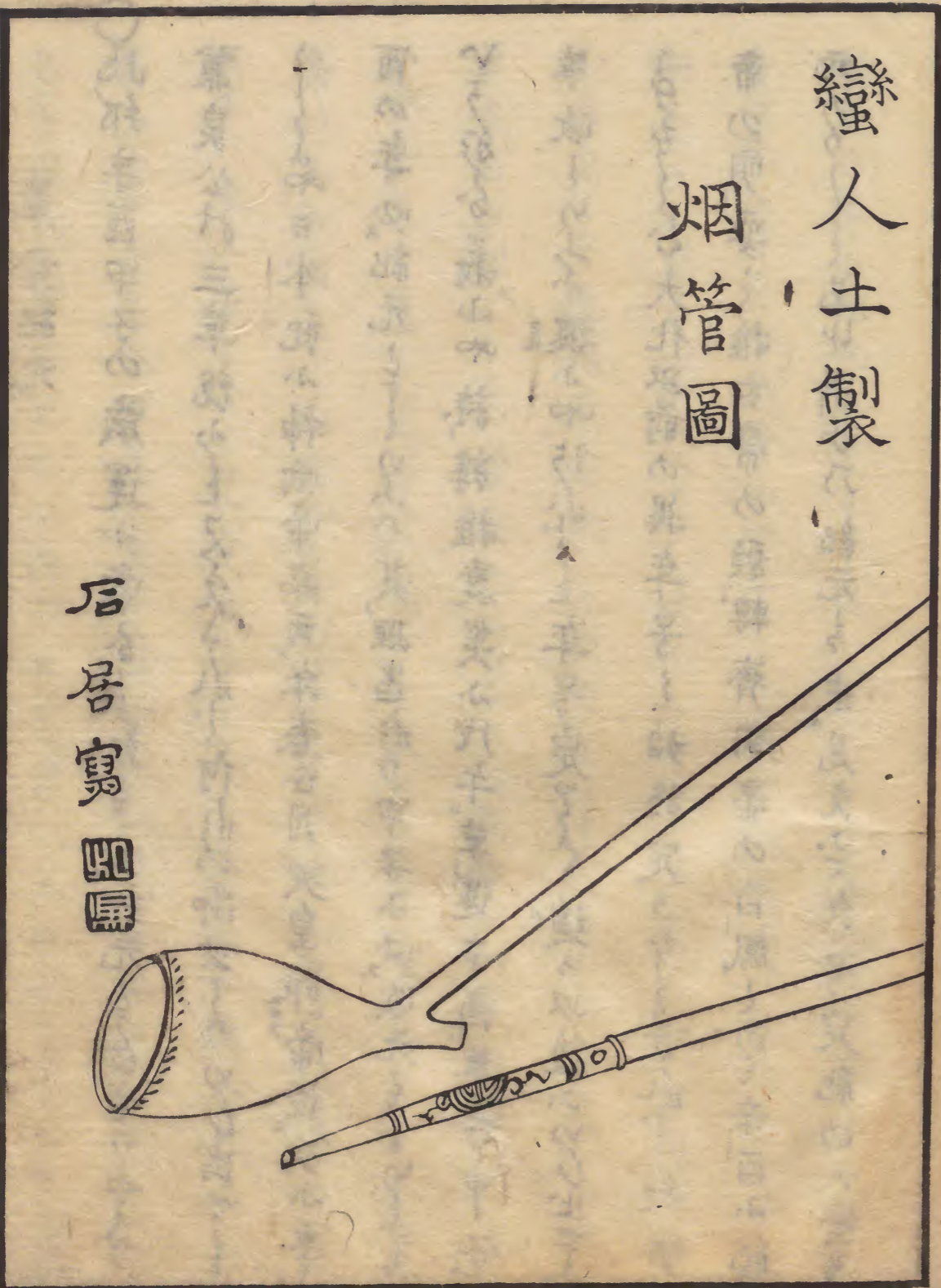
意ハ一故家ハ蠻人土制衣れ烟管ありと尤乃如

管子圖



蠻人土製

烟管圖



后居窠 如屏

管子圖

革命紀元

○此邦辛酉甲子の歳運ふ當ふるとたるを必す紀元ととふのりつりき
 兼良公は三革説つとるえふれど何の御世のりつし出せり
 ～～や日本紀は神武帝辛酉年春正月天皇即キミヲ帝位ニ故辛
 酉の年必す紀元ととりハ其理當り甲子は必す改元ととりハち
 いろぬか義も詩緯推度災小戊午革運辛酉革命甲子は
 革政とりハ據ユふやければと年号定まるく遙ニ以後のりつし出せり
 ～～む大化以前の異年号と始終定まるくざらば欽明
 帝の明要と推古帝の願轉齊明帝の白鳳との辛酉は紀
 元ありしと見ゆ甲子の紀元と未ダ見えど年号定紀の大寶も

辛丑の年は紀元ありし辛酉は改元なりし聖武帝の辛酉甲子と
 ち改元ありし桓武帝の甲子と仁明帝は辛酉は改元なりし醜
 淵帝の辛酉は改元ありし甲子となりし村上帝の辛酉は應和甲
 子は保と後栢原帝は文龜永正と五百四十三年のあい
 ど辛酉甲子とち皆改元ありし正親町帝の辛酉甲子はも
 改元なりし後水尾帝は甲子と改元ありし辛酉となりし靈元
 帝は天和貞享とり當今はりいてかまざく改元ありし然らば辛酉
 甲子は必す改元ととりハ定法と見える帝王編年記云延
 喜二十三年昌泰四年七月十五日改元依辛酉革命老人星也
 孔雀經御修法記云土御門天皇建仁元年二月廿一日壬寅修

漢書卷之六

孔雀經法于闐院建仁元年此等の紀と考ふる
神武帝御即位の辛酉を必定法則紀元をとももる
は老人星辛酉厄ハ辛酉ハ緯書佛氏等のハ説ハ
人君體元以居正元年と稱カ大法ハ勿論辛酉
甲子の改元ハ漢人定法ハ紀ハ緯書の類ハ王
俊川曰緯書多以三字為名中皆異端邪術之流假託聖
經以售邪誣之說其書今雖不存而類書引用尚多終惑
後學見瑯琊代醉王者此大義法則を取ルの書ハ改元立
號ハ國家第一の大義ハ劉炫曰唯王者然後改元立號
見左傳漢人紀元の法ハ倣ハ緯書佛氏等異端冥妄乃説

取ルの法ハ文字を用ハ一字ハ四字ハ古例
法則ハ方日升曰案紀元ハ一字ハ紀元者始ハ漢文帝
後元年景帝中元年ハ二字ハ紀元者始ハ漢武帝建元元年
以三字ハ紀元者始ハ梁武帝中大通元年ハ四字ハ紀元者
始ハ漢哀帝大初元將元年ハ今詳立號紀元ハ當始ハ文景
非武帝也見韻會舉要小補此邦異年號ハ兄弟和倭黃繩白鳳雉
此三字ハ又天平感寶天平寶字天平神護神護景雲の四
字ハ漢土ハ倣ハ文字の美惡義理ハ
勿論吟味講究ハ古人の倫辨ハ考索ハ紀元ハ
改元ハ誤と論ハハ明の燧和

漢書卷之六

仲が千百年眼卷十小國家以改元レ為重ト然レ歷世無窮ト美名有
限ト遂有前後相復之嫌ト中ト又當詳措國運ト如宋改治平ト而說
者謂火德不宜用水則我朝土德不宜用水犯之者有ト中ト耗損元ト
氣之嫌又當審國姓ト如周高祖姓宇文改元宣改當時以為文
亡ト日ト是也又當避忌國号ト如唐禧宗改元廣明ト而當時以為唐
去其口而著黃家日月後果為黃巢ト所篡ト是也大率離合
之讎深微難逃ト最宜熟察桓玄改元大亨ト議者以為一人二
月了果二月乘輿反正于江陵梁豫章王棟武陵王紀皆改元
天正說者謂二年一年止トいへる其ト他齊後主緯ト龍化と
改元ト隋煬帝ト大業と改元ト未齊頭祖と天保と改元し

宋徽宗ハ宣和と改元ト欽宗ハ靖康と改元ト各皆其ト徵トを
載トり又正ト此ト字トハト一ト止トと合トせトく正トと
すト此ト正ト始ト正隆ト正平ト正曆ト正法ト乃類皆古徵トりトいトふトずト
いトり正ト此ト字トも用トぬトるトはト一ト此ト邦改元トあトはト毎
小難ト陳トりトいトふトはトあトかトハ專トらトるト此ト等トのトはト是ト非トをトひトかトぬト
トいトふトるト

紫色

今トの紫トハ古トの紫トりトいトふトをト論語トと孟子トハ紫ト之ト奪ト朱トといトふ
ハ其ト色ト朱トハトいトふトがトいトふトなりト今ト此ト中ト緋トの本ト紅トハトいトふトがトいトふトのごトとし
古トの紫トハ和ト漢トととト染ト草トちトいトふトありト朱トハトいトふトがトいトふトなりト趙彦衛

が雲麓漫抄云孟子云惡紫奪朱也蓋朱與紫相亂久矣
 仁宗晚年京師染紫變其色而加重先染而作青徐以紫草
 加染謂之油紫自後只以重色為紫色愈久人愈珍之與朱
 大不相類淳熙中北方染紫極鮮明中國亦效之目為北紫蓋
 不先染青而改緋為脚用紫草極少其實復古之紫色
 而誠可奪朱則知古之朱赤汁染之紫與朱實相本不
 多今之淺紫甚似之矣とつり古此紫ハ下染り青色と
 用のど最初小緋色ハ染其上ハ紫根汁と少ハ加けるハ
 朱色とつりハと一朱と奪りとつりハ宜なりとつりハ今の紫ハ
 後世のつりあく彼土あくハ油紫しり此邦も古ハ茜草汁ハ

と染るハあら朱ハあらひヤす一茜指紫とはけるハ其色似
 たりとつり元來紅紫緋緋等の色ハ間色少く聖人々
 命服とつりハ隋唐のびり和漢とつりハ高位貴官の命服
 とも奇なりと隋禮儀志ハ大業元年煬帝詔ハ牛洪字文
 愷等創造章服差等五品以上通著紫袍六品已下兼用緋綠ヲ
 胥吏以青庶人以白屠商以皂士卒以黃とつりハ是レ漢土少く紫色
 と用のか始なり二儀實錄ヲ隋煬帝詔ハ牛洪等三四品通著紫ヲ
 五品朱六品已下綠とつりハ杜氏通典ハ以紫緋綠青為命服とつりハ
 於隋帝巡遊之時而其制遂定於唐とつりハ是レ唐書馬
 周ハ傳小三品服紫四五品朱六七品綠八九品青とつりハ其差別

馬周より始ふ此邦も推古帝十一年始行冠位當隋文帝仁壽三年其

大徳小徳も今の四位ゆく紫冠に始なり皇極帝紀も私授紫

冠於子入鹿とあか階位と僭とつと訾り孝徳帝三年ふ

七色一十三階乃冠制と定めまふ深紫と第一と次直緋

次小紺とつるハ漢土の制小倣いしと見ゆ二條裳束抄小異

朝ハ紫と朝服小用ぬど婦女此服小近きと以て褻服と

せどしつ階煬帝より一品紫次緋次ハ緑を用ゆる見

ゆといひ野宮定基卿抄小李唐之制以紫爲貴本朝衣服令

專据唐開元令立制とつるも是なり一説ハ漢土より遙く以前より

漢書夏侯勝曰取青紫如拾芥揚雄曰紆青拖紫是其證なりと

ちつハ漢の制百官服色と考より青紫と服する官なり當時青紫を

眼ハ皆是貴官燕居の此色次第行ゆる弘仁元年九月廿五

日壬戌制大臣身帶二位者聽著中紫今宜改著深紫又諸王

二位已下五位已上及諸臣二位三位者依令條著淺紫今改著中

紫と日本後紀小見え又延喜彈正式少とつる萬葉集又

紫の名高浦とほげ多くつるハ其色高貴なるを以て

たつ花鳥餘情序も東琴と諸器の上りおき紫を萬

色の外小貴ぶし書き枕草紙もとつ紫なるハ何と

も知てつと書き和歌六帖も

紫ハたつとつ位の色なりハ濃も落も上著なりと

此色ハ婦人又ハ僧道もふハ似合と色なりと

朝廷命令を執ひて威權の服ハ甚柔弱少く聖人命服ハ
玉ハざるも宜かり王棟ガ燕翼貽謀録ハ中興以後行都貴
賤皆衣ル黝紫以赤紫為御愛紫無敢以為袍衿者獨婦人
以為衿襖爾とあり又僧の紫袍を著るハ漢土少くハ代宗
實録ハ大曆三年僧惠崇内賜紫袈裟記以為僧賜紫衣之始
とあり又唐會要ハ開元二十年波斯王遣僧及烈至唐勅賜
紫袈裟とあり又祖庭事苑僧史略ハ則天の朝ハ僧法
朗等大雲經を譯し符命の言を陳ふハ因て紫迦沙龜袋を賜
と始とありといつて此邦少く紫衣を賜ふハ玄昉道鏡より始
り此色の起つてを考ふハ和漢とも婦人御愛の色とあり

流例とあり高地位推貴の服とあり奇なりとあり

封字

○今人書狀と封とありハ等と引ハ封字の傍とあり封
どりの意なりいづれの比も墨と引ハハちりしや江家
次第正月十日縣召除目下ハ今夜加波加利大臣卷大間次
結固成文結之上引墨已上入一宮進之とあり又北山抄に
封字代近代急引墨と見ハ枕草紙 物の條ハ 文のひ
とびつるかともたそ文もいときさなげハ文字ナリぬぐりて
上引引つらける墨とありハとハてせりるハ夫木集ハ
此度を見く返りて手馴つ引墨とハ文字ハ上書

疫神

神代卷之七十一

廿四

○疫疾と神と崇め祭るは和漢とも小あり此邦ハ古より
 殊小甚しく續日本紀より光仁帝寶龜四年秋七月癸未祭疫
 神於諸國同六年八月癸未祭疫神於五畿内同八年二月庚
 戌遣使祭疫神於五畿内同九年三月癸酉又於畿内諸界祭
 疫神是より以來引續く祭り紫野今宮神社ハ皆人の知所
 少く朝野群載小正曆五年六月安置疫神祠船岡山寛治中
 祭刀福請和歌於藤原長能其辭云

今よりハ荒振心まはるなる乃都り社ごとく

白妙乃豊幣とてり持ていとひぞ初に紫の野り

二首後拾遺集小見ゆ漢土少くハ湧幢小品 卷十 苜堅死于
 新平佛寺見夢寺主磨訶曰改為五宮則已不則盡殺居者
 果死疫相継因共改寺為廟遂無復疾疫正月二日民競祀
 以大宇號曰苜家神是ちの諸神記小今宮神社ハ長保三年五
 月九日被遷坐疫神紫野京師衆庶行御靈會被遷此所依靈
 夢之告也 世傳向答も長保三 されハ今に紫野り遷ハ苜堅
 疫神とてかしく夢の告なり又愛宕郡祇園の社も備後
 風土記と篋篋内傳との寓言小の 蘇民將來とて祝
 文かかるともハ中臣被抄小貞觀十八年疫神の崇め
 六月七日十四日神泉苑小送て祇園會とたりといひ今少く

ハヤラ牛頭天皇し稱し今宮と一體の神とせり牛頭天皇
と稱とほいづれの比より始しや應仁延久の宣命より祇園
天神といふより李岡氏いつる

如是院年代記より正曆五
年建祇園大神堂といふ

大職冠像并印

○大職冠鎌足公の御よりハ世人乃遍く知所りし姓氏録
兒屋命二十三世孫小徳冠御食子之長子御母ハ扶桑畧記ハ
大伴夫人と申し奉は一子橘夫人と申し公御母ハ胎中ニ在
とらり十二月御聲外ふつゆといひ推古帝二十二年甲戌八
月廿五日和州高市郡小誕生し初ハ中臣鎌子連といふ皇

極帝四年夏六月中大兄皇子と相議し逆臣蘇我入鹿と誅

し其族蘇我蝦夷等と夷滅し勲功小より孝徳帝

御宇以中臣鎌子連始為内臣し職原鈔より載り

右大臣の上より令外官より此官に任じ鎌子と
改と鎌足といふや孝徳帝五年紀に鎌足連といふ

其後天智帝八年十月十五日庚申小東宮大海皇子と内

臣の家小遣し内大臣し大職冠を授け藤原朝臣の

姓とす大職冠ハ正一位の名し織部の冠小緒と

縁小より入し極官の服なり此冠と戴く人ハ衣服令

小據ハ深紫と袍とよりなり

藤原ハ地名藤原系云大和
同十六日辛酉御壽五十六歳

少くも、^ハ莞^ハト^シマ^シハ^シぬ^ハ同國十市郡倉橋山多武峰^ニ葬^リ奉^ハ公^ノの^墓
とし、横津、国嶋、下郡、安威村より、公の庶子、^ハ定^ニ慧^ニあり^テ者^ハ白雉四年遣唐使^ニ從^テ入^リ唐^ニ其^ノ喪^ニ遭^フむ^ル朝^レ日^ニ改^メ多武峰^ニ葬^リす^ル十市郡妙樂寺護國院^ニ定^ニ慧^ノの^建立^スり^テ公^ノの^祠廟^ニ正^ニ堂^ニ東^ニより^テ元^ノ亨^ニ釋^ス書^ニ僧^ニ定^ニ慧^ニ率^テ其^ノ徒^ヲ屬^ス上^ニ阿^威山^ニ取^リ遺^體改^メ葬^ス於^テ此^ニ建^ス祠^ヲ廟^ヲ墓^ヲ上^ニ又^ニ起^ス三^層浮^屠以^テ薦^ス公^ニ即^チ此^ニ天^安二^年十^二月^ニ獻^ス年^終荷^前之^幣或^ル一^故家^ノ公^レ御^像寫^真の^圖り^縉紳^執柄^家より^出る^り威^體服^度お^着と^感此^ノ旨^ヲ孝^德帝^三年^ニ七^色十^三階^レ冠^制を^定め^しま^し一^時の^服なり^古の^圭冠^を柔^うふ^くり^け緒^みく^括く^るふ^いえ^甚古^雅う^く燕^尾も^下る^りなり^巾子^も今^れぐ^く高^くハ^ひく^ト枕^草紙^り見^ゆ物^の條^雨の^つく^る日^ひさ^げ馬^よの^りく^前驅^一

る^人の^つく^るも^むげ^人の^きぬ^下る^きも^むく^るなり^るい^ふび^くむ^し是^冠の^落く^柔なる^る徒^抄草^り此^は冠^ハむ^くり^遙高^くなり^るあ^り或^人仰^られ^古代^の冠^桶を^持る^人い^はな^はは^今用^のる^{なり}し^は是^冠の^巾子^後世^高く^なる^をり^み今^公レ^冠服^を見^る古^代温^順寛^厚の^風を^感し^又公^の印^は高^美蓉^が手^録せ^り甚^古雅^{なり}當時^の印^を彫^刻せ^り後^考を^ます

大職冠鎌足公
真像



天降異物并月桂

○天より異物を降るといふ和漢とも古くを數度あり奇しくすふ
 々々和邦よりハ天武帝七年冬十月甲申朔有物如綿零
 於難波長五六尺廣七八寸則隨風以飄于松原及葦原時人曰
 甘露也 日本紀○按ざる甘露の降るる類聚国史祥瑞部小數多
 るえうれど此朝如綿といひ長五六尺廣七八寸といひ六異物云々
 聖武帝天平十四年正月廿三日己巳陸奥國言部下黑川郡
 以北十一部雨赤雪平地二寸 續日本紀 仁明帝承和五年七月
 十八日癸酉有物如粉從天散零逢雨不銷或降或止同九
 月廿九日甲申從七月至今月河内參河遠江駿河伊豆甲
 斐武藏上總美濃飛彈信濃越前加賀越中播磨紀伊等

十六国一一相續言有物如灰從天而雨累日不止但雖似怪異
 無有損害 續日本後紀 文德帝齊衡三年八月八日戊寅安房國言
 天雨黑灰從風而來委地三四許分 文德實錄 陽成帝元慶八年六月
 二十六日秋田城雷雨晦冥雨石鏃二十三枚七月二日飽波郡海
 濱雨石似鏃其鏃皆向南陰陽寮占云彼國之憂應在兵
 賊先是國忌御齋會布施依式克用官家功德分封物
 三代實錄○按ざる雨石鏃といひ雨石似鏃といひ天より降るる
 物は是ハ雷斧石といふ物は雷雨の後山中より多く生じること
 なる本草小載る霹靂礎ハ此なり月令廣義小雷公石といひ玄中記
 小石礎といひ俗に狐の斧といふ天狗の斧ともいふ越後山中其外奥
 州津輕美濃金生山なるも尤國の正史小載るる大抵右乃
 多し雷雨の後多く降るるなり

又宝龜七年仁和元年小石を降るといふ東鑑に

載り又圓融帝天延元年小大和国小水精と降と後堀河
 帝寛喜二年十月十六日奥州小石と降と後深草帝建長元
 年三月十六日常陸国小菱と降と龜山帝文永三年二月二日
 泥と降す後花園帝文安元年三月四日豆と降と中原康富記
小是日洛中
 之男女皆申云自空虚大豆小豆降ト云云雨降時分交下其跡如
 大豆之形但慥非大豆歟下女等拾取持來之間見之所詮如米之
 實歟何様表豊年嘉瑞者哉珍重日本昔不知時代大麥自空中
 降下又饑降事在之由見類聚国史云云漢家例周室王屋之上有大
 化鳥此鳥牟麥銜來ト云云后稷之時五穀之種自空虚降下ト云云慥可引
 勸之近江国饑降山云云名所在之飯降之故歟見類聚国史本朝大麥
 降事清外史之所令語給也聖武天皇天平十三
 年六月戊寅日夜京中條々饑降之由見永鏡ト云
 後土御門帝文
 明九年七月北陸道小紅雪と降と一吋餘同延徳元
 年三月廿日北陸道リ泥雨と降す後陽成帝慶長元年天

下一統土と降とは是歳閏七月十二日地震月と踰とやまど諸国小
 毛と降と一吋長四五寸明正帝寛永八年十月諸国小灰と降
 と後光明帝慶安二年六月四日毛と降と一吋長四五寸靈元
 帝寛文十年三月廿九日大豆のおとれた物と降と東山帝元録
 五年七月伊賀国嶋原村小五穀と降と同十三年三月伯耆
 國小麥赤小豆と降と寶永二年一吋大豆のくつき物と降と中
 御門帝正徳二年十一月東国一統リ白沙と降と俗小舍利
降ふふと
ハ誤 同享保十九年十二月五日大豆の如き物と降と桃園
 帝寶曆六年四月朔日夜長崎小黄豆と降と後櫻町帝
 明和元年五月初旬京大坂小灰と降と同六年九月七日八日

九日三ケ日の間京大津小白毛と降ると同八年みと豆のじき
 物と降ると此類舉ぐ數へぐさし
 漢土よりハ大禹之世天雨金三日と通鑑に見え漢書
 小元帝永光二年八月小天より草と雨とつひ博物志より
 孝元竟寧元年小南陽縣に穀と雨とつひと載より又漢
 惠帝晋惠帝の時俱小天より血は雨とつひ通鑑に見え
 つまむ漢書小哀帝建平年中小山陽の湖陵に血を
 とつひ三日とつひ平帝元始三年正月小草とつひと
 を載より唐書より武后垂拱三年七月廣州に金を雨
 す事見え五行志より垂拱四年三月雨桂子於台州旬

餘乃止とつひ徳宗貞元四年陳留とつひ所小樹木と雨す
 り載より時珍綱目小宋仁宗天聖乙卯八月十五夜杭州
 靈隱寺桂子降其繁如雨其大如豆其圓如珠とつひ仁
 宗慶曆元年小京師に藥と雨より神宗元豐三年六月り
 饒州小雨木子數畝狀類山芋子味辛而香と載より元史小
 天より米と雨より群芳譜小弘治乙卯六月黦斂雨と豆
 隆慶六年四月陝西寧衛天降黑豆徧地人食之氣閉といふ
 此類も亦舉ぐ數へぐさし和漢とつひ天より異物と降る
 りの古より數度あり謝肇淪が文海披沙又ハ物理小識小異物
 此降より多く載より時珍曰後觀群書有雨塵沙土石雨金

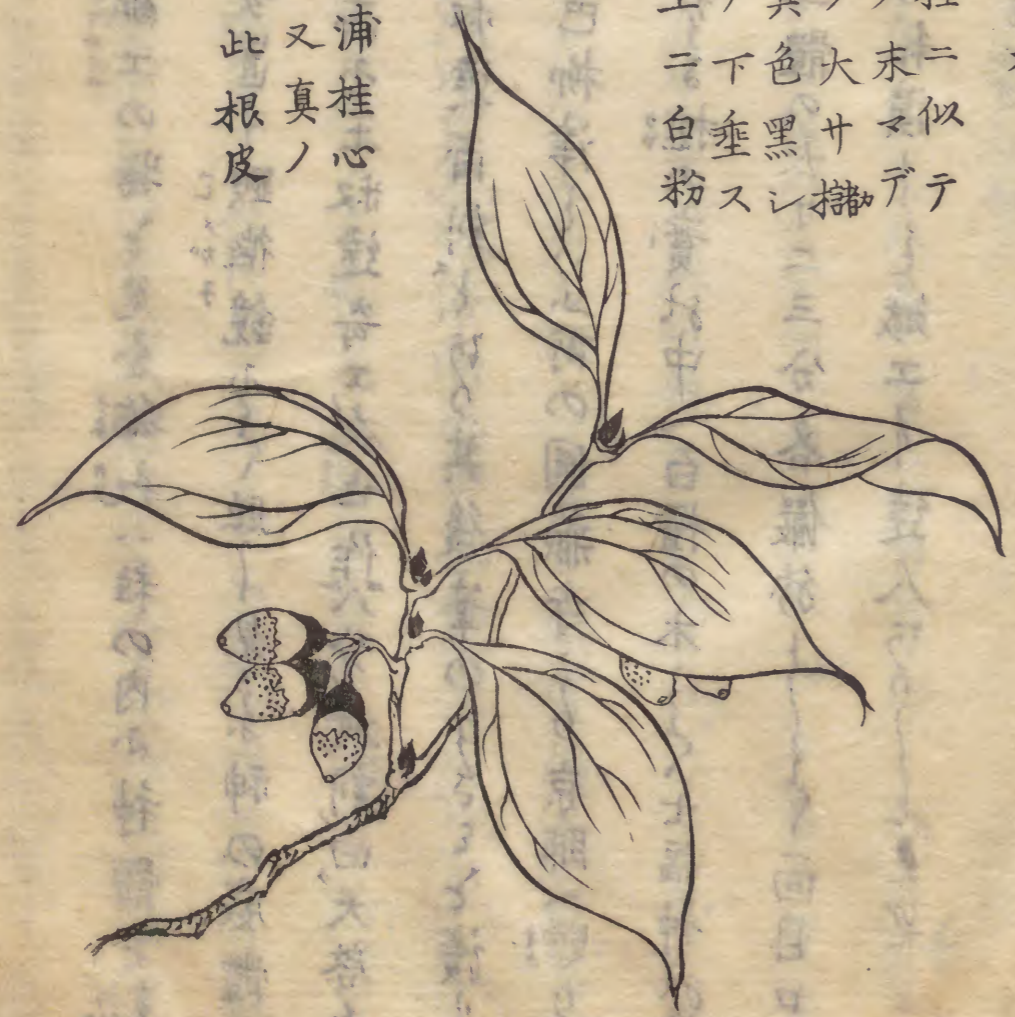
丁卯八月十五夜月有濃華雲無織迹天降靈寶云云識者
 曰此月中桂子好事者播種林下一種即活ソシ又佛氏の
 説ハ禪林備覽ハ天竺山八月十五日夜常有桂子落ソシ
 揚升庵の如き卓識此人を丹鉛總録ハ杭州靈隱寺月中
 墜桂子事怪異余按本草音經云江東諸處多于衢
 路間拾得桂子破之辛香古老相傳是月中下也載
 了最初階唐の小説ソシ起オりソシ寓言ナるソシ
 月桂の名數千載ハ傳ハるソシ故事トるソシ初唐の比ハ此邦
 へ遣唐使多く往來ハ追々彼土留學とる者も多く
 彼土の説とソシき晚唐樂天の白氏文集ナるソシ用イらソシる

彼土ソシハ故事ハ多く取用ナるソシ歌ミとソシり月の桂トりソシ
 萬葉集第四秦陽原王ハ娘子ニ賜フとソシ
 目ヲハ見トく手ヲ取ルぬ月中ハ桂ノがハ妹ヲいウ母
 是ヲを證シ後世月の桂トりソシ詞林採葉ハ
 載ル鴨長明秀逸ノ方トりソシ
 宵ハ間ノ月乃桂ノ紅ヲ散ル初秋ノ空
 月人ト又ハ桂男ト桂下ニ人トりソシとソシあクりソシ
 まシ天子御即位の時月像ハ旗徑ハ三尺上ハ玉兔ヲ圖ル中
 央ハ桂ヲ用ス此月桂トりソシ昔ハ誤ク賀茂ノ

葵不配とる桂を用ゐる來りり月の桂と云意なり月桂は
 月のこと本意なり此月桂諸国不多く喬木あり外に
 木實と違ひ其實間々遠方へ吹送る多し奇とるる
 うずとる是のち天より異物と降るとハる遠方
 より風は随と來ふものち天地の大なる歲月乃
 久しき此後又いふ多分異物の降る處もいふは若く又
 た異物の降りたるも國の盛衰歳の豊凶に當る處に必
 徴をければ古より和漢小例多れと考へ更奇異とる
 みうづがはちて愚昧鄙俗の附説を曉さむとる
 爰小録とるの

月桂 一名天竺桂

葉ノ形肉桂ニ似テ
 三縦道葉ノ末マデ
 通ラズ實ノ大ヤ掃
 子ノ如ク其色黒シ
 二三粒著テ下垂ス
 熟シテ皮上ニ白粉
 ラ生ズ



藥舖ニテ松浦桂心
 ト云是ナリ又真ノ
 根皮ト云モ此根皮
 ナリ

織工

○予先年至^{ミカサ}織工の物と見る稻殼一粒の内小神體と刻^{キザ}ミ
 兩脇^ニ狛犬^ノと安置す顯微鏡^{ハシ}を以て照^シし見^ルる神の威體儼
 然^トり虞初新志^ハ小玉叔達^ハ奇工人也^{ナリ}作^ルハ分舟^ヲ刻^シ曰^ク天啓壬戌
 秋日虞山王毅叔達甫刻^スと^リり其後筆の寸^々と讀^ムふ
 奥州會津の近邑柳津と^リり所の圓藏寺と^リり京師へ贈^ラり來
 せ^リハ長一寸許^ナなる櫃^ノ實^ニ中一白檀の木と^シて七福神^ノ像と
 彫刻せり每像一體の大サ二三分各儼然と^シて一^ノ回目口鼻
 皆具^ハは^リつ^り和漢と^シて織工^ノ達人^ノの^リり^と見^ゆ

氏正一ノ天正記

神農祭 醫祖神

○此邦乃醫者毎年冬至^レ此日^ハ當^レハ神農祭^ト稱^ス赤豆^ノ餅^ヲ
 赤豆飯^又ハ酒肴盛饌^ノ具を調^ヘ親戚交友を集^メ賀宴と^シ
 俗^ニ常例^トナ^リハ^シ是^ハ歲時雜記^ニ至^リ日以^テ赤小豆^ヲ煮^テ粥^ト合
 門食^之可^レ免^レ疫^トとい^フ又風土記^ハ天正日南^ニ黃鐘^ヲ踐^テ長^ク日^ノ足^ノ日
 始^テ芽^ヲ動^ス爲^テ饘^ヲ粥^ト以^テ養^フ幼^ク俗尚^以赤豆^ヲ爲^テ糜^ト所以^テ象^シ色也^ト
 け^ハ小^ノ据^ヲと^シ見^ゆさ^レれ^ル也^ト是^日ハ^ハ神農^ノ祭^ト也^ト所謂^{ナリ}
 又冬至^ハ庶人^ノの賀宴^ト也^ト此日^ハあ^らむ^と馬^ノ摠^ガ通曆^ス地皇
 氏^以十一月^ヲ爲^テ冬至^トとい^フく^ハ漢^ノ雜事^ハ冬至^ニ陽生^シ君子道長^ス
 故^ニ賀^スとい^フ類書^纂要^ニ冬至^ニ陽氣起^リ君道長^ス故^ニ賀^スとい^フ宋

書は魏晉冬至日受萬國及百僚稱賀因小會其儀亞于歲朝之
 此邦ありてハ 齊明天皇五年十一月一日朝有冬至之會本
 紀類聚國史卷七十四 聖武帝神龜二年十一月己丑御大安殿
 受冬至賀辭此為始より陽成帝元慶三年十一月丙辰朔冬至
 まぐ數十條と載りり其中小延曆三年十一月戊戌朔詔曰朔
 且冬至者是歷代之希遇王者之休祥也朕不德得值於今
 ありて玉燭寶典より冬至陰陽百物之始有履長之慶とふも君
 道生長の日のく君上と臣下く祝賀奉ふの日なり然るに
 庶人の家小祝賀宴樂とふハ無禮僭擬の甚き尤愚昧又盲
 とふを又是日小神農とふるをいふは所傳ありや淮

南子などの寓言と信ず然る祭り見えり三皇氏ハ人道周
 基の聖人なりハ漢土ありて大醫院小祭るよりハあはれ神農
 一人を祭る例あり又冬至小醫祖と祭る例もありて淮南子
 脩務云於是神農乃始教民播種五穀相土地宜燥濕肥瘠
 高下嘗百草之滋味水泉之甘苦令民知所避就當此之時一
 日而遇七十毒此より高氏小史司馬貞補史記程氏遺書より
 も見えり淮南子の寓言なりて王安道か滄洞集より最初
 小論と云く大不嘗りり○帝王世紀云伏羲嘗味百藥○孔
 叢子云伏羲始嘗草木一日而遇七十二毒○武林前王劍池金環
 傳云伏羲神農嘗百草○雲窗私記云古傳黃帝嘗百草

非黃帝師藥獸而知醫○神仙通鑑云帝使岐伯嘗味草木
 與生醫疾經方本草素問之書咸出焉是等の書を信ぶ
 時々伏羲神農黃帝三皇氏岐伯も亦るく草を嘗く
 神農も限て醫者の祖と祭ふも淮南子の寓言と誤信す
 ふも見ゆ漢土の醫祖と祭ふは決して冬至の日にあつて説郭
 中の潜居録も古人以八月朔為天醫節祭黃帝岐伯風俗通も八月一日是
 六神日以露水調朱砂小指宜點灸去百病又云楚俗以八月八日以朱墨點小兒額為天灸以厭病疫此等皆醫の儀なり
 又大醫院も祭るハ春二月冬十一月元月上甲日と用ふるり
 大明會典云嘉靖十五年建聖濟殿于文華殿後以祀先
 醫遣太醫院正官行禮二十一年又建景惠殿于太醫院上

紀三皇配以句芒祝融風后力牧而附歷代醫師於兩廡凡二

十八人東廡醫師十四位分設三壇 饒貸李 天師岐伯 伯高 鬼臾區 俞跗 少俞 少師 桐君 太乙雷公 馬師皇

伊尹 神應王扁鵲 倉公淳于意 張機 西廡醫師十四位 華佗

王叔和 皇甫謐 抱朴子葛洪 巢元方 真人孫子邈 藥王韋慈藏

啓玄子王冰 錢乙 朱肱 李杲 歲遣禮部堂上官一員行禮

劉完素 張元素 朱彥脩

太醫院堂上官二員分獻二殿之祭並以春冬仲月上甲日彼土

先醫と祭ふ上紀三皇ハ人道関基の聖人なり神農も

限らざるゆゑ此邦も人道関基の神人も

く醫者乃祭るるゆゑ其國も生れたる其神と祭

らむ淮南子なるの寓言も据て神農一人と祭るハ其道と失

ふもいふ此邦の神人醫祖といふ日本紀神代上一書第六

夫大已貴命與少彦名命戮力一心經營天下復為頭見蒼生及
 畜產則定其療病之方又為攘鳥獸昆虫之灾異則定其禁厭
 之法是以百姓至今咸蒙恩賴古語拾遺是乃精要記之療
 病之方則藥物醪醴也禁厭之法則咒祝方術也りりり
 此二神 日本醫道開基の始祖なり其民と濟スキヒとすミタマ御靈の
 今世イハルもア顕然トイフとトイフ著きトイフ仰ぎトイフをトイフ文德實錄云
 齊衡三年十二月戊戌戊戌ハ常陸国上言鹿嶋大洗磯前有
 神新降初郡民有煮海為鹽者夜半望海光耀属天明日
 有兩恠石見在水次高各尺許體於神造非人間石鹽翁
 私異之去後一日亦有廿餘小石在石左右似若侍坐彩

色非常或形沙門唯無耳目時神憑人云我是大奈母知
 少奈比古奈命也昔造此國訖去往東海今為濟民更亦
 來歸ルあル即チ二神此出現ル民と濟スキヒとすミタマ造ツクとツク
 二石なり神名帳小常陸國鹿嶋郡大洗磯前藥師菩薩明神社
 那賀郡酒列磯前藥師菩薩神社名神 文德實錄天安元年
 冬十月十五日巳卯條
 同トとト是レとト藥師菩薩の 其外少と二神此石像と造ツク
 玉ヒとヒ處々ニあり能登国羽咋郡大穴持像石神社能登
 郡宿奈彦神像石神社并延喜式見えり三代實錄
 九日戊子能登国大穴持神宿那彦神 萬葉集第三生石
 像石神二前並列ニ於官社ニとトり
 村主真人

大汝少彦名の座イハ一多む志の石室イハヤハ幾代経イコひ

播州石寶殿トと今ハ二神と祭マツて生石子大明神高御座

大明神と号と此コハ神代コより傳マ來マり明澄ミめく日

本紀神功皇后十三年酒樂サカホトハ歌ウタめと區クシ之能ノ伽彌カミ等ト虚

豫ヨ耳ニ伊麻イマ輸ス伊破イハ多タ多タ須ス周ス玖ク那ナ彌ミ伽カ未ミ能ノ等ト豫保ヨホ担キと

くたりの區クシ之能ノ伽彌カミと藥神クスリノカミなり奇ノ神ト云ハ非ヒろりスリノ反ハ斗ハ日本後紀

小大同三年五月甲申衛門佐安倍貞貞侍醫出雲廣貞等

撰テ大同類聚一百卷奉進ス其中コ小數アマタ多タ神方カミと稱ホとくト乃

りの神代二神の傳マくマひハ藥方クやハひハ先キ是コ小皇極

帝四年蕪我入鹿イルカと誅伐ツせツれハ蕪我の臣蝦蟇エミシ等

誅ツ小コ修シとト天皇の記キ國紀クニキ珍室タカラキと悉ツくハ燒棄ヤキりハ此時コトキ療病ヲ之方

禁厭ヒ之法ホたト皆ツ燒失ヤせツとハ覺ツ以テ實ニ長ナ大息トとハなり

なりハ大オホ巳アナムチ貴命ミコト一神七名ヒトコト分ワ京下シモカ賀茂カモ本殿前七社ヒトコト是レなり

座ヒトコト一ヒトコト社ヒトコト西ニ座ヒトコト一ヒトコト言ヒトコト又五條イツチヨ天神アマノカミ松原マツハラ通ス西ニ洞院ツツミ少彦名シコノナ命ミコト相マ

殿イハ大オホ巳アナムチ貴命ミコトとマツ糸イトはハ毎年トシトシ節分フシ夜ヨ木キの勝餅カチヒと禁

庭ニへテ獻マツル了マツ木キの神カミのハ俗ニ小コの餅ヒと書ハ俱ツク四季物シキモノ倍ツ追ツ儼ツ乃

夜ヨハ木キの餅ヒはハぐハの鳥トリなハとハ燒キ奉マツル了マツ御餉カチヒのハ御ミまツりハとハ奉マツルはハ又

世ヨ彦ヒコ問ト答コタヘ康富ヤシキ記キやハ載マツルりハ木キハ白木シロキなりハ天武紀テンブキ招魂マタマシとハ白木シロキ煎

の略語リョクゴとハ詹詹センセン言コトハ載マツルれハドト引ヒの假名ナ違ヒりハヲケハハ祈イノ禱ノ義ミチヲケラハウリ音通ネハハ雲クモ御抄ミヤクサシふハうハけハらハ花ハナの色イロにハ出デりハやハのハ糸イトをハ引ヒくハ往ユキりハりハハハ脚タビナリ

なりハ餅ヒとハ救タメとハ見ミゆハ此コノ木キ餅ヒハハ疫疾ヤクとハ除ハくハ藥品ヤクありハ今イマ人ヒト毎歲トシトシ除

新編御成金下巻

二十八

夕に祇園社よとけり参りし神前燈明の火を燃し海もれ
 たり除夕ふ木と焼く 其本ハ醫道始祖二神の御藥方なりハ
 月令廣義に見ゆ
 闇齋詩よと永言少彦名經濟起蒼生除夕世間靜神風餅
 木馨しと作り尤崇し敬祀とたなり又姓氏録より
 山城国神別神宮部造葛城猪石岡天下神天破命之後也
 六世孫吉足日命磯城瑞籬宮御宇天下有災因遣吉足日
 命令齋祭大物主神災異即止天皇詔曰消天下災百姓得福
 自今以後可為宮能賣神仍賜百姓宮能賣公然後庚午年
 籍註神宮部造也しり宮能賣神ハ即ち大己貴命よとく
 天下の災異と消し玉ひ百姓福と得るも日本紀古語拾遺

と能符合しと藥の御神なりハなる延喜式造酒司坐神六
 座大宮賣神社四座と此御神と拾芥抄小宮吟祭文に
 宮吟笠間廣前といふ其祭日ハ伊呂波字類抄小宮吟奠
 正月十二月初午日院宮諸家祭之笠間神社越前國坂井郡
 賣方家集一

天ふまると笠間此神のちりあはゆらり中といふ
 問

古語拾遺小令大宮賣神侍於御前といひハ神殿小祭は
 大宮賣も皆いふと此御神なり此邦の人醫祖を祀らバ比
 二神より外祀とて御神まきとてふを一統と欽明帝は

御代々々佛道行りしトフト神カミ御名佛ミツメ混コトどク多タ能ノ分別シどク多タ和名抄ワナヒ醫イを久須クス之シ訓クニどク多タ藥ク師シの義ノよク光明皇后佛足跡の效キコトふクしト常陸国大洗磯前オソサキサカサツラ酒烈磯前サカサツラ此二神ハ本ク藥ク師シ明神ミカミなりク菩薩ク乃號ノを付ケハ佛氏ハツシの書カキり俗稱ソコハ從ヒり大室積經オホムツツネの譬ハ如レ藥ク師シ持チ藥ク囊フ自身コノミ病ヤミ不能セ療ハ治スりス又レ佛ハ氏ノの書カキり俗稱ソコハ從ヒり大室積經オホムツツネの譬ハ如レ藥ク師シ持チ藥ク囊フ自身コノミ病ヤミ不能セ療ハ治スりス藥師ク醫家イカの祭マツりシ佛ハ氏ノの書カキり俗稱ソコハ從ヒり大室積經オホムツツネの譬ハ如レ藥ク師シ持チ藥ク囊フ自身コノミ病ヤミ不能セ療ハ治スりス稱イハ佛氏ハツシの徒シり藥師クと牽強ケンキヤウ一慈覺大師經文ニギハヤヒ修シり一佛ハツシ一神カミ來キ守護シり一佛ハツシ一神カミ藥師ク如來ニギハヤヒ一神カミ江文エフミ明神ミカミハ妄バウ説セツと信シ一ハツシ月ツキ八ヤチ日ヒ藥師ク結縁ケチ日ヒ一ハツシ藥師クと

神農カミヌとシ多ク海ウミ者ノなり其国コノクニ小生コナマシれタリ醫道イダウ祖神ソコノカミとシ又レ昧マイ文モン盲モウ至シ可カ笑ウツ可カ恥チの甚シ一ハツシ又レ醫者イシャ藥師クとシ又レ佛氏ハツシより出デ海ウミふク日本紀推古帝三十一ニギハヤヒ年トシ醫惠イニ日福ニ因等イニ並ニ從テ智チ洗セン來キ之シ惠ニ日ヒ德來トクキ五世イハヒの孫ムコ德來トクキ八月癸巳朔丁酉ニ以テ大仁藥師オホニニ惠ニ日ヒ遣ス於ニ大唐オウ續ニ日本紀孝謙帝天平二年三月内藥司ニ佐兼サカエ出雲国員外掾ニ正六位上ニ難波藥師ニ奈良等ニ中ナカ昔コト泊瀬ハツセ朝倉アサクラ朝廷テウテイ詔ミコトノリ百濟國ヒヤクサイクニ訪求ホウス才人サイジン爰コト以テ德來トクキ貢進クニ聖朝セウテウ德來トクキ五世イハヒ孫ムコ惠ニ日ヒ治田チタ朝廷テウテイ御世ミヨノヨ被遣ヒキ大オホ唐オウ學ガク得トク醫術イジュツ因ニ號ナヅケ藥師ク遂ニ以テ為シ姓セイ一ハツシ是等コノトウの藥師クと佛氏ハツシ乃ハツシ藥師クと相混アヒト藥師ク菩薩クの俗稱ソコとシ又レ此邦コノクニ醫祖イソ

字心曼録下之卷

二神を鎮坐^{チムガ}とす所ふ悉く薬師佛と安^{ヤム}坐^チとすハ桓武帝以來のゆかり尊神と胡佛と相混^{コム}とすゆかり尤^ト分^ベふとべきなり予先年日本名醫圖一幅と作^ス上二神を始^ハり國史に載^スる所悉く抄^シ奉^ル一^ニ旁^ラ近^ク世^ニ至^リ至^リはまぐれ醫名と多く載^セり藤原愛親卿より文章及^ヒ褒^テ待^トを賜^ハふを詩^ハ小^カ雅^カ廿^ニ髡^シ髮^シ學^ブ軒^ハ岐^ニ爾^ハ挈^テ青^ニ囊^ヲ不^ラ踏^マ斯^ラ表^ト揭^メ國^ノ家^ノ千^ニ古^ノ美^シ能^ク知^ル其^ノ本^ヲ是^レ良^キ醫^トとこハ予が浪^ニ華^ニふりり弱^ク冠^ニのひかりき

中神金神

○此邦昔より方^{カタ}違^ハ方^{カタ}塞^フ方^{カタ}忌^ムをとりし中^{ナカ}神^{カミ}金^{カネ}神^{カミ}を避^ヘる事

りり物語の類ふ多^ク載^セり源氏帚木卷中^{ナカ}神^{カミ}内^ノハハふさかりしと書^キゆは内^ノ裏^ノより左大臣の御所辰巳れ方ふあり故より中^{ナカ}神^{カミ}ハ倭名抄^ニ天一^ノ神^{カミ}ナリと訓^スたり天一^ノ神^{カミ}ハ地^ノ星^ノの靈^レとて中央^ニふ立^テゆ多^ク中^ノ神^{カミ}といふ金匱^ニ經^ニは天一^ノ立^テ中央^ニ為^リ十二^ノ將^ト定^ム吉凶^ヲとあり陰陽書^ニは天一^ノ遊行^ノ方^ノ角^ノ百^ノ事^ノ犯^シ向^ハ之^ニ大^ニ凶^シといふ曆家^ニは此^ノ神^{カミ}四方^ニ五日^ニづ^ク四^ノ維^ニ六^ノ日^ニづ^ク巡^ル行^ハ凡^ソく四^ノ十^ノ四^ノ日^ニ下^リ土^ニと巡^ル日^ニと重^ク長^クありといひ一名長^{ナガ}神^{カミ}といひ此^ノ後^ニ上^リふ上^リの経^ノ間^ニ癸^ノ巳^ノと始^メり戊^ノ申^ノと終^メり凡^ソく十六^ノ日^ニと天一^ノ上^リと名^付ハ方^ノ行^クも忌^ムなりといひ通^シ書^ニ大^ニ全^クは鷄^ノ神^{カミ}遊^ル方^ノ毎^日各^ノ有^リ避^ヘ忌^ム但^シ癸^ノ巳^ノ日^ニ到^リ戊^ノ

申、日、鶴神在天、无避忌者、といふ是神、あつて百鬼經、小
天女、化身、といふあり、此神、子向、と方違、方塞、といひ、忌避、ふ
かり、北山抄、小方忌、といひ、此、の、あつて、十訓抄、小俊頼朝臣
曰、白河院、淀、御方違、行幸、ありと見ゆ、又此神、と太白神
といひ、袋草紙、小明日有、還御、ハ、當、太白の方、と書、り、元來
ハ、陰陽家雜書、より出、つ、あつて、物語類、小多く載、つ、る
を、遂、ハ、陰陽家、此職、となり、後世、は、傳、る、の、よ、な、り、ぬ
後撰集、り、
逢、る、の、れ、方、つ、り、く、君、あ、ど、ハ、思、ふ、心、の、違、ふ、り、ぞ、
金葉抄、小

三十二

忌、し、や、ハ、一、夜、巡、る、の、神、し、き、け、な、ど、逢、る、れ、方、違、ら、む

又、金神、を、忌、避、ふ、と、保元平治、以前、より、見、え、く、百練抄、云、
後、白河、天、皇、保元二年十二月廿二日、諸卿、定、申、諸道、勘、中、金神、
方、忌、可、被、禿、哉、否、事、件、方、角、永、長、定、俊、真人、依、申、出、三、四、代、所、
忌、來、也、自、今、以、後、不、可、忌、避、之、由、宣、下、有、之、仁、安二年二月廿三日、為、
御方、違、行、幸、鳥羽、殿、修、理、大、膳、職、之、間、為、避、金神、方、と、此、
金神、ハ、山海經、萬斛、明珠、三才圖會、に、載、と、西方、尊、收、
金神、左、耳、有、青蛇、乘、兩龍、而、目、有、毛、虎、爪、執、鉞、といひ、是、也、
元來、陰陽家雜說、あり、正史、に、あ、り、然、か、を、昔、より、忌、さ、
く、ハ、高位、權貴、乃、側、に、陪、侍、乃、女、多、く、居、く、雜說、奇談、と、す、

金葉抄、下、之、卷

金神

三十三

毎月其君小言上ゴト十ハ八九ハ女と共小忌避イミサクはるるなりぬ
 聖人、不語ラ怪力乱神ヲ又有識の人ハ雜說方忌ハ決クワく信
 せぬ其訣ハ漢土イミサク大歳と忌避イミサクはる此邦中神金神オカミ コムジムを忌
 避イミサクふト同ク大歳ハ三才大歳ハ三才然カるカ西陽雜俎西陽雜俎に百姓王豊ハ常ニ於テ大
 歳上ニ掘ル坑ヲといひ宋仁宗ハ嘉祐年中東華門を建ツは時リ
 東家西ハ乃ヲ西家東西家東乃東家西大歳果何カ在ルといひ
 董表儀ち土を掘ハく肉塊ニククといひカと人大歳ハといひカとカ
 河ハ投ナく何のけりカとカとカ幽怪録ニ載セる有識の人ト
カとカ思フ鬼門金神ノヲ本朝ニ俚語ト
カとカ論ス

金神

王思義三才
圖會ノ載ル



庭忌草

○芭蕉と庭忌草と名付るハ 桔梗ときちりふとつふとあゆとく
 字音ゆくハ歌ふとくふたふとく名付ふふや庭忌といふ
 佛書よ此身如芭蕉と云其葉脆く風ハ破れやとれた故り
 庭ハ朽ふとつと忌といふとく西國ゆくとハ神社佛閣より外も
 植へど然るよ此草ハ玉咲くめと優曇華の咲くるとく大貴ぶ
 と亦とくハ優曇華ハ般泥洹經ハ閻浮提内有尊樹生名優曇
 鉢有實無花優曇華ハ三千年ハ一度花咲く輪王出世の瑞あり
 一名靈瑞花とつと人壽ハ萬歳の時輪王四州と巡る其時海
 水半現とつと及び此花咲くとつと人皆貴賞とつと見

ゆ東鑑ハ鎌倉浄密法師が庵ハ優曇華ハ咲くとく人多く
 群聚せり二位禪尼左近將監と遣はくと見せるとつと芭蕉の花
 なる元來此草花の著兼はとのなり花と生ると枯るとつと一
 草一花とく用舎甚とつと何とつと蔵玉集よ
 吹風の草ハ破ると庭忌草ハ朝端ハ燈乃影
 火車
 ○西國雲州薩州の邊又ハ東國とて間々ありとつと葬送のつと
 俄ハ大風雨ありとつと往來人と吹信とつと烈とき時葬棺と吹上吹

飛とつりりその時守護の僧珠數と投がくしが異ゆなり若左な
 きとれは葬棺と吹飛りて尸と失るゆゆり是と火車に投れり
 多く大に恐れ恥るゆなり愚俗に言傳ふそ人生涯に惡ゆくと
 多くせし罪にゆり地獄の火車が迎ひ來りてゆり後ふて尸と
 引裂き山中の樹枝又ハ岩頭を掛置るゆゆり火車と名付るハ
 佛者ゆりゆり出りゆりゆり法事瀆ふ無量カ林當上而下火車
 爐炭十八苦事一時來迎りゆり因果經ハ今身作後母使冠前母兒
 者死墜火車地獄中がど愚俗と驚畏せりゆりゆり慈鎮の拾
 玉集よ

火乃車今日ハ我門に居るもゆりゆりありゆりゆり地へ巡る

行らむ

其、火車に投れりゆりゆり和漢と多くゆりゆり是ハ魍魎
 りハ獸の所為なり罔兩と方良とも書く酉陽雜俎ハ周禮ハ方
 相氏歐罔象好食亡者肝而畏虎與柘墓上樹柘略口致石虎為
 此也とあり此、獸葬送の時間と出く災とあり漢土カハ
 聖人の時より方相氏ゆりゆり熊皮とゆり目四つある形ハ
 作る大喪の時ハ柩ハ先立と墓所ハ至る墳ハ入くと戈とゆり四
 隅とち此、獸を歐るゆり是と險道神ゆり事物紀原ハ見え
 る此、邦ふくと親王一品ハ方相輜車とゆり喪葬令り見ゆ
 今、俗葬送に龍頭と先立ると其、送意なり時珍の綱目ハ

述異記と引く秦の時陳倉人獵シ此獸とゆり形ハ若
イコノ羴若羊ノとゆり古ノより愚俗乃ハ混ル火車ト名付ル地獄の
ヒノケム火車ト思ふ笑ふノだニ
淮南子小載セ罔ハ兩ハ大和本草ハ俗ハ河ハ太
歸とソ獸カりシ是ハ本草細目ハ溪鬼ハ附録ハ
出る水虎ト通雅ハ水ハ窟ハ水ハ窟ハ名ハり形猴ノかハく山く鼻長ク赤毛ト
載く項に血り全躰龜の種類みく水居ク人ト捕リ食フ者カり

魁 魎



飛鳥寺銘 并 三賃由來

○大和國高市郡飛鳥寺光銘云推古天皇十三年歲次乙丑四月八日
 戊辰以銅貳萬三千貳百斤金七百五十九兩敬造釋迦丈六像銅
 繡二軀并狹侍等

是國史ハ載ルる文ハ能ク符合セり

日本紀云推古天皇十三年夏四月辛酉朔天皇詔皇太子大
 臣及諸王諸臣共同發誓願以始造銅繡丈六佛像各一軀乃
 命シ鞠作鳥ニ爲シ造佛ノ之工是時高麗國大興王聞日本國天皇
 造佛像貢上黃金三百兩同十四年夏四月壬辰銅繡丈六佛
 像並造竟

東方文獻録下之卷

是即光銘と云々其本ハ百濟國より起り欽明帝紀
 小六年秋九月百濟遣中部護德菩提等使于任那贈吳財於
 日本府臣及諸早岐各有差是月百濟造大六佛像製願文曰
 蓋聞造大六佛功德甚大今敬造以此功德願天皇獲勝善
 之德天皇所用弥移居國俱蒙福祐又願普天之下一切衆生皆
 解脱故造之矣と云々因と推古帝右の佛像と造ると云々
 然るに此邦小銅金二貨の見え初ハ其年より遙々後世の
 ころ當時はわがの銅金を用ゆるも高麗王貢金に餘ハあ
 りと貯おきしや彼此と疑ふ者あり因と國史と考ふに其年よ
 り遙々以前より金銀銅の三貨はわがの神代の時白銅鏡ハ

咫鏡ハわがの銅貨と造ると云々ハ金銀二字を
 初ハ神代紀上一書曰素戔嗚尊曰韓郷之嶋是有金銀若使
 吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也と云々人皇此御代とな
 りハ仲哀帝紀小八年秋九月乙亥朔己卯有神託皇后而海曰
 中略愈茲國而有寶國譬如美女之嫁有向津國眼炎之金銀彩色
 多在其國是謂栲衾新羅國焉と云々古事記小西方有國金銀
 爲本目之炎耀種種珍寶多在其國といふ是なる
 神功皇后紀云九年春二月足仲彦天皇崩冬十月辛丑從和
 珥津發之便到新羅中略仍賈金銀彩色及綾羅縑緞載于
 八十艘船令從官軍是以新羅王常以八十之調貢于日本其

三韓の金一兩

是之縁也於是^テ高麗百濟二國王^中自來^テ于營外^テ叩頭^テ歎曰
從^レ今以後永稱^レ西蕃不絶^レ朝貢^ニ故因^テ以定^ル内官家^ニ是所^レ謂^フ
之三韓也

是^レ其年^ノ三國^ニ王年々^ニ金銀^ト此邦^ニ貢^ル上^ル知^ルぬ

又魏志^ノ明帝景初二年十二月詔書報^ス倭王^ニ又特^ニ賜^フ

金八兩五尺刀^ノ口銅鏡百枚^ヲ景初二年ハ皇后三十

八年小當^ル又齊王正始元年奉^テ詔書印綬^ヲ請^リ倭國^ニ賜^フ金

帛錦^ノ蜀刀鏡米物^ヲ正始元年ハ皇后四十年小當^ル

され^バ三韓の外漢土^ノと金銅^ト此邦^ニ貢^ル上^ル

亦知^ルぬ
按^ズ三韓^ノ貢^ル金銀^ノ量數^ハ詳^クな^リ其^ノ形^モ詳^クな^リ魏^ノ晉^ノ一^ノ兩^ハ今^ノ二^ノ錢^ニ三分^強半^ナリ

當^ル八兩^ハ今^ノ十八^ノ錢^ニ四分^強半^ナリ

顯宗天皇二年冬十月戊午朔癸亥宴^ス群臣^ヲ是時天下安^ニ平民

無^レ徭役歲比登^ル稔百姓殷富^ニ稻斛銀錢^一支

是此邦錢貨^ヲ見^ルえ初^メなり皇后新羅の役^ニ此朝^ニ

至^ル二百八十七年其間小鑄錢の^ノ見^ル泉^景

顯宗の御時^ニ文武^ノ御守^ト共^ニ其^ノ錢^ノ文^ト載^ル宝曆十一年
辛巳十月七日撰津天王寺村南平野町綠屋^ノ田^ノ地^ノ字^ニ眞宝院^ト稱^ス
と^ル島^中無^レ紋^ノ銀錢^凡百枚^ヲ得^テ官^ニ納^ム即^チ是^レなり^ノ重^サ
二文目八分

武烈天皇紀伏願^ス陛下仰^テ答^フ靈祇^ニ弘^ニ宣^ス景命^ヲ光^ニ宅^シ日本^ニ誕^ニ受^ル銀

郷^ニ

是^レ三韓銀貨^ト貢^ル上^ル天皇^ノなり^ノをい^フ

三韓の銀貨

繼體天皇六年冬十二月略夫住吉神初以海表金銀之國高麗百濟新羅任那等授記胎中譽田天皇故大后氣長足姬尊與大臣武内宿祢海國初置官家為海表之蕃矣其來尚矣

是即神功紀不見えるふくく三韓此外任那りも年

年金銀と貢上せるり知ぬたり故は二十三年夏四月戊子

任那王ミマナ已能末多干岐來朝オホトモ大伴大連金村オホムラ啓

て曰夫海表諸蕃自胎中ミエシ天皇置内官家不棄本土封其地

良有以也マコトニと合あはせあはる

宣化天皇元年夏五月辛丑朔詔曰食者天下之本也黃金萬

貫不可療飢白玉千箱何能救ハ冷ラ中略是以海表之國侯海水

以來テ宿望シ天雲テ而奉貢ラ自胎中之帝オホヒ洎于朕身

是ハ黃金萬貫カトヘ譬の言カハハ下シ文胎中之帝ミ及シ時ハ

上文ノおなりく譽田ホムカ天皇以來貢キと奉たりりとふ ○以上推古

于國
史者

はハ仲哀帝九年冬十月皇后新羅ハ役キり推古帝十三

年に至らりく四百六年の間三韓及漢土任那ミマナ貢キ上タる

所の金銀其量數ハ測ハるる故ハ顯宗の朝小銀

錢を交易シて國家ニ通用シり造佛のハ國家ニ金銀多

きり銅も是レに準ジてはなり

法ハ不レ變レ録ハ史者

皇極天皇元年二月丁亥朔壬辰高麗使人泊難波津丁未遣
諸大夫於難波郡檢高麗國所貢金銀等并其獻物使人貢
獻既訖而諮云

長即皇極帝の御代まゝ金銀を獻するの事あり

孝德天皇大化二年三月癸亥朔甲申詔無藏金銀銅鐵一以

瓦器合古塗車蕪靈之義同三年是歲制七色一十三階之冠略

小錦冠以上鈿雜金銀爲之大小青冠之鈿以銀爲之大小黑冠之

鈿以銅爲之

是ハ二年葬棺の制と陳する時ハ金銀銅鐵并四貨と禁

ト三年冠制と陳する時ハ金銀銅の三貨と用る各法度

天武天皇三年三月庚戌朔丙辰對馬國司守忍海造大國言銀

和銀出するは四百七十六年の間國家通用する所の銀貨悉

皆外國貢上り物とある也 ○以上推古帝以後

載千國史一書

始出于當國即貢上由是大國授小錦下位凡銀有倭國初出于

此時故悉奉諸神祇亦同賜小錦以上大夫等

是此邦銀貨始發少く人皇より第四十代一千三百三十四

年後かり唐高宗上元元年ふ當る其堀出せり山ハ三代實

錄よ貞觀七年八月十五日癸亥太宰府言對馬嶋銀穴在下縣

郡自高山底穿鑿巖堀入四十許丈白晝執炬而得入
 とりの其銀を貢上せし文ハ朝野群載に對馬貢銀記あ
 り其山ふ社と建ふハ神名式に對馬嶋下縣郡銀山上神社是
 かり此貢銀ハ白石の五事略に天武白鳳三年三月對馬より
 銀と貢ども是延喜式に太宰府より毎年銀八百九十兩に
 貢どもし見えしハ對馬より出せし所なり此後鳥羽堀川此
 頃まづ對馬より銀出せしと云ふ事ありといふ

同八年十月戊申朔甲子新羅遣河食金項那沙食薩藥生朝
 貢也調物金銀鐵鼎錦布馬狗驢駝之類十餘種亦別獻物
 天皇皇后太子貢金銀刀旗之類各有數

是時ハ金銀二重ハ獻物に後十年十月ハ

同十年四月己亥朔辛丑立禁式九十二條因以詔之曰親王以下至
 于庶民諸所服用金銀珠玉紫錦繡綾及氈褥冠帶并種々雜
 色之類服用各有差

是ハ金銀富有ハ庶民ハ服用するハ其
 禁式と云ふハ

同十月丙寅朔乙酉新羅遣沙喙一吉食金忠平大奈末金壹世貢
 調金銀銅鐵錦絹鹿皮細布之類各有數別獻天皇皇后太
 子金銀霞幡皮之類各有數

是前八年十月ハ獻物ノ例おな

同十二年四月戊午朔壬申詔曰自今以後必用銅錢莫用銀錢乙亥詔曰用銀莫止

是ハ和銀の出十年後ののり以前頭宗の朝より引續く鑄るる銀錢なるや洋なるがれ四月十五日より銀

錢を禁ぶ其四日後十八日小通用とて詔ゆるハ決りて見ゆ此年銅錢とあるハ外國貢上の銅を用ゆるハ勿論

かりと何れの年小鑄るるや詳々なるがれ和銅の出分是より廿六年後ゆく鑄錢司と置くるハ持統帝八年

朱鳥元年夏四月庚午朔戊子新羅進調從筑紫貢上細馬一疋騾一頭犬二狗鏤金器及金銀霞錦綾羅虎豹皮及藥

物之類并百餘種亦智祥健勳等別獻物金銀錦霞綾羅金器屣風鞍皮絹布藥物之類各六十餘種別獻皇后皇太子及諸親王等之物各有數

是ハ前八年十月又十年十月小献ふし例かた

持統天皇二年二月庚寅朔辛卯太宰獻新羅調賦金銀絹布皮銅鐵之類十餘物并別所獻佛像種々彩絹鳥馬之類十餘種及霜林所獻金銀彩色種々珍異之物并八十餘物

是ハ天武の朝獻物と品種少々異なる

同五年秋七月庚午朔壬申伊豫國司田中朝臣法麻呂等獻宇和郡御馬山白銀三斤八兩銚一籠

是ハ據^{コト}バ當時伊豫^ノと^シ銀^ヲ出^セリ銀^ハ斤^兩と^シハ是

を始^メと^シ斤^兩の名漢書律曆志^ハ二十四銖^ヲ為^ス兩^ハ十六兩^ヲ為^ス斤^トい

此邦幾^ノ兩^ノ幾^ノ分^ノ幾^ノ銖^ノ延喜式^ハ載^セる^ハ又^モ此^ノ歳^ノより人^ノ銀^ヲ賜

ふ^ハ例^トし^テなり^ニ九月^ハ己^未朔^ニ壬^申賜^フ音^{博士}大^唐續^守言

薩^弘恪^書博^士百^濟末^士善^信銀^人二十^兩同^十月^戊戌

朔^ハ己^亥賜^フ醫^{博士}務^大參^德自^珍咒^禁博^士木^素丁^武

沙^宅万^首銀^人二十^兩同^六年^二月^丁酉朔^丁未^陰陽^博士

沙^門法^藏道^基銀^人二十^兩と^り

同^八年^三月^甲申朔^乙酉^以直^廣肆^大宅^朝臣^麻呂^勤大^貳

臺^忌寸^八嶋^黃書^連本^實等^拜鑄^錢司

是^レ此^レ邦^ノ鑄^錢司^トを^シ始^メたり^和語^連珠^集小^持統^天皇

八^年に^テ鑄^錢司^ヲ始^メと^シ見^ゆゆ^ハ此時^未本^邦に^テ銅

無^シ異^邦より^テ來^ル所^ノの^銅を^テ鑄^ルに^シたり

続^{日本}紀^云文^武天^皇二^年三^月乙^丑因^幡國^獻銅^鑛同^九月

壬^午周^芳國^獻銅^鑛同^十二^月辛^卯令^對馬^嶋治^金鑛

是^ハ銅^金と^シ掘^出し^のま^ハ生^銅生^金の^一名

少^ク鑛^銀々^本草^蒙全^ク見^ゆ石^州方^言に^テ銀^のと^りと^り

金^銀銅^と掘^出し^のま^ハ銅^絲の^如く^束と^り形^{なり}石

雜^ニと^りハ^非なり^又銅^の蔓^金の^蔓と^りハ^非なり^銀

の^蔓ハ^金苗^銀苗^と天^工開^物ヲ^見ゆ^是を^治と^り竿^金板^金と^りハ^金貨^銀

貨物類と造らる見えず今の銅の竿と板とありて之を遺
形なりしはれども當時の金貨銀貨ハいろいろの形なりや
詳なり

同三年十二月庚子始置鑄錢司以直大肆中臣朝臣意美麻呂
爲長官

是ハ文武の朝ハ銅鑛金鑛ありて出るふり鑄錢司と置
鑄させ

大寶元年三月戊子遣大肆凡海宿祢鹿于陸奥治金

是ハ陸奥ノ金出るふりて之を治ししる見
ゆりしと何れノ所ハ出るハ詳なり

同金と出すの後よきと見ゆ

同三月甲午對馬嶋貢金建元爲大寶元年始依新令改

制官名位号甲午ハ二十一日

是此邦金貨の始發あり人皇より第四十二代一千三百六十

一年後あり唐中宗嗣聖十八年ハ當は皇后新羅の役あり

此朝和金物なるは五百十三年の間國家用ゆる所ハ金貨

悉皆外國貢上の物あり然るに對馬嶋より此和金と貢と

小因て文武帝五年三月廿一日大宝と紀元あり

其一日改元年号始於此是歲對馬島貢金由是三月廿一日甲午改元大寶

是より以來歴代の年号連綿し數千載ハ相續ゆるハ金是日本金貨の盛徳

長久の兆しありて、此貢金八年前十二月辛卯キタハ治シりしる。
 金鑛キかり故コは是歳八月丁未キ先是遣シ大倭国オレ忍海郡人三
 田イ首イ五瀬於對馬嶋ニキ治成黃金サ至是ニり又對馬嶋及郡司
 主典已上進位一階其出金郡司者二階獲金人家部宮道授
 正八位上并絶綿布銀復其戸終身百姓三年又贈右大臣大
 伴宿祢御行オ首遣キ五瀬治金因賜大臣子封百戸田四十町フり
 此の當時金貨を貴重しめりし知るる金銀圖録より對
 馬国高木握小判金重四匁津字 高木二字銘 載り此貢金と砂金といふ説は
 且シ據ルバ當時紀伊國よりと銀と出せり
 同三年五月己亥紀伊國阿ア提テ飯イ高ヒ牟ム漏ロ三郡獻銀也

元明天皇和銅元年正月乙未朔乙巳武藏国秩父郡獻和銅詔
 曰云云略慶雲五年而和銅元年為而御世年号止定賜
 是此邦銅貨の始發めり人皇より第四十三代一千三百六十
 八年後より唐中宗景龍二年小當る皇后新羅の役エキり
 此朝和銅ゆゑより五百二十年に間国家用ゐる所の銅
 貨悉皆外国貢上の物なり先是文武の朝小因幡周イナ芳ハ二
 国より銅鑛と献タテマツりしり熟銅なり此朝熟銅と献
 り小因と慶雲五年正月十日和銅と改元り
 如是院年代記云
 正月十日改元和

銅自武藏秩父郡貢熟銅故

同二月甲戌始置催鑄錢司

是此邦和銅と以て錢を鑄るの始とて文と和同開珍といふ其
後歴代の鑄錢毎小最初は和同開珍一錢と鑄るは定例といふ

此錢泉彙より出

和銅と和同は作らハ
當時省字の法なり

同五月壬寅始行銀錢 秋七月丙辰令近江國鑄銅錢八月已

已始行銅錢

是ハ催鑄錢司と置れ新に鑄るは銀錢銅錢と行ふ故也

始行といふ

同二年正月壬午詔向者頒銀錢以代前錢又銅錢並行比好盜
逐利私作濫鑄紛亂公錢自今以後私鑄銀錢者其身沒官

行濫逐利者杖二百加役常徒知情不告者各與同罪

是ハ新鑄の銀錢と以前の銀錢を代とて又新鑄の洞錢と
並び行ふは私鑄の者なり故に此詔ありたり

同二年三月甲申制凡交關雜物其物價銀錢四文已上即用
銀錢其價三文已下皆用銅錢

是ハ銀錢少きより因て先其價を貴く後是と廢し
專に銅錢と行はむが為なり

同三年九月乙丑禁天下銀錢

是ハ前年銀錢の價を貴く後又是と廢し今年に至ると
禁せむが為なり同四年冬十月甲子私鑄の者と嚴重に制

勅あり同六年三月壬午ふ賣買田以錢為價の詔あり同七年九月甲辰の制不得擇錢の勅ありと銀錢と重し銅錢を行ひ濫錢と破らむが為なり

元正天皇養老五年正月丙子令天下百姓以銀錢一當銅鐵二十五以銀一兩當一百鐵行用之

是ハ銀銅鐵の三品其充用此制と定む銀錢一文と以て銅錢鐵錢の廿五文と當又銀一兩と以て鐵錢百文なり

當と行ひ用ゆるものと示しあり
鐵錢此朝と始ると當時の銀一兩諸説ありと詳なり

此強解

同六年二月戊戌詔市頭交易元來定價略中更量用錢之便宜

欲得百姓之潤利其用二百錢當一兩銀仍買物貴賤價錢多少隨時平章永以為恒式

是ハ前年銀一兩と一百鐵と當と用ゆる制ありとて錢の價ふ高下あり多少と因とかりバ市頭とて交易とす時ハ一兩と二百錢と當とて通用せよとかり是歲九月庚寅令伊賀伊勢尾張近江越前丹波播磨紀伊等始輸錢調とあり錢の多寡と知らむ為と見ゆ

聖武天皇天平二年三月丁酉周防国能野郡牛嶋西汀吉敷郡達理山所出銅試加冶炼並堪為用

是ハ文武の朝と周芳國獻銅鑛とあり種類あり

金一...

四十八

同七年閏土月庚子更置鑄錢司

是ハ諸国より三貨ありし物より持統文武元明三帝の

例ハ倣ハ更ハ鑄錢司と置キ

同二十一年二月丁巳陸奥國始貢黃金於是奉幣以告畿内七道

諸社 丁巳ハ二十ニ日なり

是即世ハ所謂奥州の貢金なり其堀出セシハ稱徳帝紀ハ

陸奥國馳驛貢小田郡所出黃金九百兩我國家黃金從此

始出焉といふ小田郡ハ金華山なり其山ハ社と建ルハ神名式

ハ小田郡黃金山神社是なり今之仙臺も此金と出...

金華山より起ル名も陳子昂が春日登金華觀詩

白玉仙臺古といふ小田郡金華山ハ黃金と水精といふ

因...

仙臺城下儒士の著セリ奥羽觀跡聞老志ハ陸奥の砂金ハもと小田郡陸奥山よ出づ山ハ式ハ載る所の黃金山神社

此貢金を延喜式交易雜物ハ陸奥國砂金五十兩といふ小右記ハ長元二年九月前陸

奥孝義志砂金十兩といふ東鑑ハ文治二年十月陸奥國今

年貢金四百五十兩といふ物も五事略ハ其後後白河の

項も参らせり後世ハ陸奥國永字小判金

一名秀 即此ハ其始ハ對馬の貢銀と大抵同ハ貢賦ハ

衡小判 此金ハ諸書ハ多ク載ル聲價世ハ高ク人ハ此

ハ異朝も聞クヤ東西洋考 形勝名 東奥州

事ハ漫録...

産黄金處と^ルハ物産引僧奮然曰東奥州産黄金西

別島出^ル白銀以為貢賦と^ルハ宋史日本傳其訣あり是^レより

七年前聖武帝天平十五年冬十月辛巳詔曰奥以天平十

五年歲次癸未十月十五日發菩薩大願奉造盧舍那仏金

銅像一軀盡^テ國銅而鎔象削大山以構堂及法界為朕知

藏遂使同蒙利益共致菩提と云云同月乙酉小皇帝近

江此紫香樂宮より御一右大佛の像と造り奉むるあり

始^テ寺地を開き^テ此^レ時行基法師弟子と率^テりて多

の衆生と勸誘せり同十六年十月壬申小近江の甲賀寺より

右大佛の像と^ル骨柱出來^ルる^ル皇帝^ニさ^レる^ルもの

繩と引^キて同十七年八月其大佛を南都東大寺より移

は^ル此佛像と鑄^ルり數萬^ト金銅と用^ウる^ル朝野群載

大佛を鑄^ル時熟銅七十三萬九千五百六十斤白錫一萬二千六百三十八

斤煉金一萬四百三十六兩銅五萬八千六百二十兩炭一萬六千三百五十

六石と乃^チ其像を裝飾せむと^ル國家の金銅と多

く用の盡^スる^ル其料金無^ク是非異朝へ乞^ヒ求^ムむ^ル

陸奥國守百濟王敬福より黄金と貢^スす^ル于^テ時天平

二十一年二月丁巳二十日^ハり天皇限^リり^テ感悅^スる^ル同年夏

四月甲午朔幸^シ東大寺御盧舍那佛前殿北面對像^ニ勅^ス陸

奥國守從五位上百濟王敬福伊部内少田郡仁黄金在奏^シ臣

献^ス此^レ遠聞^ニ食^シ驚^キ悦^ビ備^フ貴^ク備^フ念^ハ波^ハ盧舍那仏乃^チ慈賜^ス比

福波倍賜物有止云下略此日授百濟王敬福從三位元亨

陸奥國守敬福と銀青光祿其翌二日乙未小天皇又大佛の

前殿小御大臣以下多くの百官士庶と行列是日改天

平二十一年為天平感寶元年如曼院年代記云四月二日改元萬葉集第十

天平感寶元年五月十二日於越中國守館大伴宿祢家持

作之

須賣呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈派美知能久夜

麻爾金花依久夫木集殷富門院大輔咲初黄金の

此年号天平感寶ハ年中改元一々年代曆不載清

輔奥儀抄見えり又同年五月庚寅陸奥國免三年

調庸小田郡永免同閏五月甲辰授獲金上總國人大部大麻

呂從五位下授治金人九京人戸淨山大初位上出金山神主小田

郡下部深淵外少初位下同秋七月甲午是日改感寶元年

為勝寶元年其後廢帝天平寶字二年八月戊申の勅信

終出勝宝之金我國家於是初有奇珍開闢已來未聞若斯

盛德者也高野天皇天平神護二年六月壬子我國

家黄金從此始出焉此貢金大佛の用其大仏

の名殊高く光仁帝宝龜五年十月己巳條文德實錄齊

衡二年九月甲戌の條同三年五月丙寅條三代實錄貞觀

三年正月廿一日丙申同三月十二日丙戌の條載聲價代々

美定海録下之卷

世は高く人のいひ傳えく異朝きと聞ゆるは先是
文武の朝大室元年三月甲午對馬嶋貢金あり實ふ此邦金
貨の始發わく先聖武帝大佛の前わく勅あり此大倭國
者天地開闢以來ふ黄金人の國より獻ふるは斯地
はハカリ物と思へふと宜ハ甚く佛の泥く媚縮ひふ
る此帝ハ其姓光明皇后皇女孝謙帝二代とて深く佛
と信く出家しつゝ二代とて御謚と奉らむ
續日本紀
聖武天皇注云謹案勝宝七歲勅曰太上天皇出家歸佛更不奉
謚至宝字年勅進上此號謚孝謙帝注云出家歸佛更不奉謚
因取宝字二年百官此邦國家第一の宝貨と大半佛氏乃
用とかり後世は流傳しつゝ推古聖武二帝は御代より

始ふ其原と百濟王より始く備と作り西蕃外國の徒吾
皇國小害あるは識者考ふは

天平感宝元年四月乙卯陸奥守從三位百濟王敬福貢黄金九百兩
是ハ二月丁巳二十日始貢と物ハ異なり四月二日感宝と改元は
三月同月乙卯廿二日四月二十二日なり終るは稱徳紀ふ治鑄
云畢塗金不足而陸奥國馳驛貢小田郡所出黄金九百兩
といハ二月丁巳二十日此貢金と九百兩なり此歳二度の貢金合
せく千八百兩とあるは

孝謙天皇天平勝寶二年三月戊戌駿河國守從五位下摺原
造東人等於部内廬原郡多胡濱獲黄金練金一分於

美定海録下之卷

五十二

是東人等賜勤臣姓、同年十二月癸酉授駿河國守從五位、
下勤臣東人從五位上、獲金人元位、三使連淨足從六位、下賜絶
一十尺綿四十屯正稅二十束、出金郡免今年田租。

是ハ文德實錄仁壽二年二月乙巳滋野貞主卒條ニ曾祖父

相原東人天平勝宝元年為駿河守于時土出黃金東人採

獻之帝美其功曰勤哉臣也遂取勤臣之義賜姓伊藤志

臣といふ是なり此獻金ハ風土記ニ薦河國薦河郡鞠込貢

天平黃金といひ宣秀卿記ハ亨祿四年駿河金といふ物あり後

世ハ傳る駿河今川永四貫小判金即此なりと

時練金沙金一分と
りハ分兩此分るや
此金三品あり
圖録ニ出當

同四年二月丙寅陸奥國調庸者多賀以北諸郡令輸黃金其

法正丁四人一兩以南諸郡依舊輸布

是ハ奥州此地おひく金貨と出さふり調布の代ハ黃

金と納しむるなり調布此代ハ金貨分量の制と立し

見えり其量未詳なり源平盛衰記ハ小松内府重盛

公奥初知行此時氣仙郡より金千三百兩を参りてりといふ

是等の調金なりや後世ハ傳ふ奥上字小判金分

銅金種々ありれども必當ずれば徴なり

廢帝天平寶字四年三月丁丑勅云云略頃者私鑄稍多偽濫

既半頃將禁斷恐有騷擾宜造新樣與舊並行庶無損於

上ノ下ノ是ノ録一ノ云

民有益於國其新錢文曰萬年通寶以一當舊錢之十銀錢
文曰太平元寶以一當新錢之十金錢文曰開基勝寶以一當
銀錢之十

是ハ金銀銅の三貨を鑄させしむ是れ銀銅鐵三

錢を以てしむ金銀ハ見えぬ金錢を此朝小始ふ萬年通

寶ハ銅錢なり 按るるは錢文ハ通寶ト名付るハ萬年通寶ト始ふ
漢エウク通寶ト名付るハ唐高祖開元通寶ト始ふ

通鑑ハ金銀以一當十といふハ漢土の制法なり後漢西

域傳ハ大秦國以金銀為錢銀錢十當金錢之一といふ

萬年通寶泉彙小出

稱徳天皇天平神護元年九月丁酉更鑄新錢文曰神功開

寶與前新錢並行於世

是れ銅錢なり前此新錢ト並びり

宇鑄之ハあり王思儀ガ三才圖會ニ
小窓別記ト引ク神功開珍トあり 同二年十二月是歲私

鑄錢者先後相尋配鑄錢司駈役あり是れ私鑄

は者ハ皆鑄錢司ノ屬託ト此錢三品泉彙小出

光仁天皇家龜三年八月庚申太政官奏去天平寶字四年三

月十六日始造新錢與舊並行以新錢之一當舊錢之十但以

年序稍積新錢已賤限以格時良未安穩加以百姓一人間

償宿償者以賤日新錢一貫當貴時舊錢十貫依法雖相

當計價有懸隔因茲物情擾乱多致誼訴請新舊兩錢

天平寶字四年三月

拾芥抄ノ神功
開寶ハ稱徳御

同價施行奏可ス

是レ寶龜三年ノ十三年以前ニ鑄テ新錢段々ニ價賤ナリ一錢十錢ト引替ヘの制ヲ以テ之ト下リ
新錢一貫ヲ以テ高時ノ古錢十貫ニ引替ヘ差引
故リ毎々ニ誼譁ノ訴訟ニ及ブ新錢古錢ノ價ハ一ニ通用セ之レと奏シ之レ聞ケ布ル

同八年五月癸酉ニ勅シ渤海王書ニ曰ク云ク又緣都蒙請加附黃金小一百兩水銀大一百兩

是ハ渤海國ノ使者都蒙ガ歸ル時天皇ノ彼土ニ賜ル黃金ヲ小一百兩ト之レハ此時黃金ノ大小ハ分カち

同十年八月壬子ニ勅シ去寶龜三年八月十二日太政官奏永止舊錢全用新錢今聞百姓徒畜古錢還憂無施宜聽新舊同價並行

是レ即チ三年八月庚申ニ奏シ勅シ之レ其年永止舊錢全用新錢トハ奏セ之レ新古一貫十貫ノ高下ハ之レの時ニ百姓等古錢ヲ畜ヘ持テ格別ノ損ハり施ス之レ也ト價ハ通用セ之レ

桓武天皇延曆九年冬十月甲午復置鑄錢司
是レ先例ニ依テ

日本紀略云桓武天皇延曆十五年六月壬戌木工元上道廣成授

外從五位下下褒ル採ル備前國銀之功也

是レ據ル當時備前の國ノ銀ト出セル

日本後紀云桓武天皇延曆十五年十一月乙未略上是レ以テ更

鑄テ新テ錢ヲ仍ニ增ス其直ヲ文曰隆平永寶宜以テ新テ錢一當テ舊テ錢十

新舊兩色兼テ使シ行セ用セ但レ舊テ錢者始リ自リ來レ歲限以テ四年ラ然後ニ停

廢ス辛丑始用新テ錢一

是レ平安城遷都以後ニ鑄ラセル方レ後ハ四年ト

限テ通用ニ停止セリ此レ錢ノ大小中數品ノ三品泉彙ト出ル年往

全用大坂掘江川少く此錢數枚と掘得り其所の橋と隆平橋と名くとり

同十平八八五時法室金三平八八八日大坂有本本山會堂

同十六年二月甲申略上勅云云今聞京職多有收錢車須賤本ノ費

末一絶ニ收ル錢ヲ但レ恐ル民有貧富不必蓄ニ穀宜聽ル貧乏之徒進ル錢ヲ

通計不得過四分之一ニ

是レハ京職の者多く錢ト收メ其價ヲ高くシ貧乏ノもの不

便チあり其制ヲ立テあり

類聚二代格第十延曆十七年九月乙丑是レ日太政官符禁ニ斷ル

貯ル錢事被シ右大臣宣テ備奉ル勅用ル錢之道取ル於テ輕便有無レ物利彼

此得ル宜者也如キ聞カ外國吏民多有貯ル畜ル京畿士庶還テ乏ニ資用既非

物利之義亦失レ得ル宜之方宜下ニ嚴制不得更ニ然ル

是レを畿内ノ外レ國ノ多くシ錢ヲ買テ貯メ京畿ノ錢之利

芳窓漫録下之卷

用り不便なるあり畜銭を禁じしむるなり

日本後紀云平城天皇大同三年五月己丑勅百姓之間新銭未
多宜新舊列用濟民之乏

是ハ以前より古銭多く隆平永寶此新銭多うは其中
りハ收銭れ者もり乏民ハ行渡らざる故り新古共小列
用の融通やもりのゆかり

弘仁元年十二月廿日丙戌銅銭司用乘銅鑄進新銭一千卅貫
因茲賜禄有差

是ハ銅銭司より銅れ有餘と計く隆平永宝と铸く進献
と大同三年新銭未多とり鑄進するあり賞矣と

禄とくまふなり

按ずる類聚國史第百七職官部十二
鑄銭司條に載つる文長し故に畧と

類聚國史第百七職官部 弘仁七年秋七月戊寅廢鑄銭司

是を鑄銭司を廢せしむ其決りて同月癸巳詔日本紀畧
を考ふる

日本紀略云弘仁九年十一月辛巳朔詔曰云云略改錢文曰富壽
神寶

是ハ隆平永宝の錢文を改ふる延喜通宝と乾元大宝と
改ふしかなし此錢四品泉彙より出

承和符云 八年閏九月 弘仁十二年七月壬戌符 備得鑄銭解

備依太弘仁九年六月十一日申官支度帳件錢每年鑄作可

上平記略

進而始自九年至于今年堀採之銅乏少作物之類有欠望請五千六百七十貫之内減定三十貫文每年作貢但豐銅之年隨即陪作不必限以此數

是ハ官ノ申上ル支度帳の^レ陳^ル方^キ弘仁九年六月十一日小鑄錢司より申上ルハ毎年五千六百七十貫づ^レ調進可^ク汲^スの所其年より今十二年七月ま^デぐ四年此間堀出す銅乏^ハ少^ク錢^ノ外^ニ銅器^ヲ造^ル外^ニ定數^ノ内^ニ三十貫^ヲ減^ズ毎^年調進可^ク汲^ス銅^ノ豐^ク出^ル年^ニ三十貫^ヲ限^ル其^レ倍^ノ鑄^作ら^ル事^ナカ^ル

承和符云^ニ八年閏九月^ニ淳和天皇天長三年九月乙酉下^ル民

部省符^ニ偶^ニ相^ニ轉^レ舊^テ錢^ヲ鑄^テ造^ル新^テ錢^ノ間^ニ宜^ク停^テ鑄^テ錢^ノ料^ノ銅^ノ令^テ進^ル年^ノ料^ノ熟^ク銅^ノ千^斤ヲ

是ハ此^レ朝^ノ舊^テ錢^ヲを^レ相^ニ將^ル新^テ錢^ヲを^レ鑄^テ作^ルもの^ニて^テ新^テ錢^ヲ出來^ルす^レの^レ間^ニ鑄^テ錢^ノ司^ニへ^テ賜^ル料^ノ銅^ヲを^レ停^テ止^セず^レ小^ノ諸^ノ國^ノより^テ貢^進す^ル熟^ク銅^ハ毎^年千^斤づ^ク定^ルら^ルを^レ同^ノ八^年三月^ニ癸^ノ卯^ニ鑄^テ錢^ノ司^ノ秩^期一^ニ准^テ諸^ノ國^ノと^テ類^聚國^ノ史^ノ職^官及^テ承^和二^年三^月十^五日^符を^レ見^ルる^事なり

○六^ノ史^ノ中^ニ日本^ノ後^ノ記^ハ缺^本あり^て全^部カ^レ故^ニ日本^ノ紀^ノ略^類聚^國史^ノ類^聚三^代格^承和^年符^を以^テ年^ノ序^とす

續日本後紀云^ニ仁明天皇承和二年正月廿二日戊辰令^テ鑄^ル新^テ錢^ヲ

下詔曰云云略是以上今制新錢以叶適變文曰承和昌寶以新錢之一當舊錢之十新之與舊宜令並用

是歲新錢を鑄すは年号を以て錢文を承和通宝と始

ハ銅出らふ因て是と異なり年号錢文ハ承和通宝と始

る此錢二品泉彙より出 漢土より年号錢文ハ南宋ハ孝文帝孝建四銖錢と始也

同二月廿三日戊戌下野國武茂神奉授從五位下此神坐採

沙金之山

是ハ延喜式ハ下野國より毎年砂金百五十兩練金八十

兩づ貢とていふものなり 圖録より上野國吉豆小判金一名是利小判載る

同三年正月廿五日乙丑詔奉克陸奥國白河郡從五位下勳

十等八講黃金神封戸二烟以應國司之禱令採得砂金其數倍常能助遣唐之資也

是を奥州白河郡より砂金を採得て遣唐使に入用と助

つふあり其賞を封戸を充てまつる

嘉祥元年九月十九日乙亥令鑄新錢下詔曰云云略宜改舊貫

於鳥鑑磨新彩於金刀文曰長年大寶一以當舊之十新之

與舊並用雜行將令用不倦既富之而教之

是ハ年号改元を因て新錢と鑄すは是れ錢二品泉

彙小出

三代實錄清和天皇貞觀元年四月廿八日癸丑詔曰云云略上

宜改舊幣更制新錢勒此變通救彼流弊文曰饒益神宝
一以當舊之十即舊之與新並令雜用 同年十月廿八日庚戌
是日鑄錢司進鑄錢

是も年号改元よ因と新錢を鑄うてあふかり是歲二月廿
五日長門國海部男種麻呂といふ人と採銅使と三箇年
は内年々銅鉛三千斤づ進むるを載しは新錢の
用となしとまふゆゑなり

同七年六月十日己未禁京畿及近江國賣買之輩擇并惡錢
是る太弘仁十一年六月九日大藏省小下知ありと鑄錢
司より進獻とる所の新錢を文字少々不明又少は疵あり

通用妨妨清取渡り是ハ文字不全是ハ輪郭
有缺なりといふと十二三ハ嫌ふなり此度嚴重ハ禁制
せしむる通用せしむるなり

同九月廿六日甲辰勅木工寮採銅於山城國相樂郡岡田郷
舊鑄錢司止

是ハ岡田郷採銅せしむる同九年六月九日丙子ハ勅同
十一年七月十日丙寅の採銅使元慶五年六月丁丑朔採銅
使停止同八月廿日丙申採銅使返進を皆是なり

同十二年正月廿五日戊寅詔曰云云略錢文曰貞觀永寶一
以當舊之十母子相隨並共通用同八月五日乙酉鑄錢司

新鑄金之卷

進新鑄貞觀錢一千一百十貫文

是歲又鑄錢此錢泉彙不出母子といふハ母種錢子ハ通用錢

陽成天皇元慶三年十月十三日己巳勅令太宰府庫物之代

砂金六百三十三兩水銀百七十斤注附官帳先是府司申請

每唐人來募貨物直借用庫物交関畢後以砂金給官給

綿惣計返納其砂金一兩充綿十六屯絹一疋宛十四屯府司

不能勸行來尚矣

是ハ當時砂金と綿絹を充てて交易すれば其一兩をいつ程と

いつのりともるやり金銀國品ハ砂金圖り

以上國の六史日本紀續日本紀日本後紀續日本後紀文

德實錄三代實錄ハ載る金銀銅鐵ハ四貨及代々鑄

錢ハ沿革勅命制令の文とて皆めりぬ是を見と

心史ヲ載る寶貨ハ大率知ぬ

拙十のり外國貢上の金銀ハ皇后の御代ハ始り和銀の出はる

天武帝三年ハ始り獻銅鑛と治金鑛ハ文武帝二年ハ始

り貢治金ハ大寶元年ハ始り獻和銅ハ元明帝和銅元年

ハ始り陸奥貢金ハ聖武帝天平二十一年ハ始り其の中ハ練

金砂金黃金ハ大小あり銀ハ白銀及銚ありいづれも形ハ

洋ナリ又金ハ分兩あり銀ハ兩斤あり其量目も亦洋ナリ

練金ハ後世ハ竹流金とて竿金といふ説もあり砂金ハ金

銀圖品ハその形を載るれど國史ハ記さざる砂金ナリヤ砂金

砂と砂と二品あり砂金の碎石又ハ金礪中より出づ強流水の底より
あり佐渡松前より出ると此實といひ伊豫より出ると茄子野といひ砂金
ハ水砂中よりあり佐渡西三河伊豫三角寺奥の院及吉野川此底
あり人民遊みく掘取ハ大ニ人力を費し利あり今ハ此を止む
りハ砂金を治ハ熟金と云れ生金是なり砂金と鹽上ニ置キ炭火焼
金沙集く玉となる俗金丸といひ和漢三才會より云えり宋の朱
輔が漢蠻叢笑ハ二種共ニ載く名絲金といひ天工開物ハ二種と載
と国史より見えり砂金ハ何れなるや詳々云ひ黄金と小一百兩と
ありハ大小あり見ゆ其形量目詳々云ひ白銀と銅と砂銀と其
形量目皆詳々云ひ

大抵六尺ハ載りしハ国家通用ハ錢貨の多く用ひる金
銀二貨今れごとくハ用ひる見ゆ勅命制令ニ貨の

かりありと云ふなり

宇多天皇寛平二年鑄寛平大寶

是錢泉彙より出 二品あり

醍醐天皇延喜七年鑄延喜通寶

是錢泉彙より出

是錢天明二年壬寅三月下旬撰津國川邊郡
東長洲村より数枚掘出せり銅錢多し鉛錢

少

村上天皇御宇鑄乾元大寶 見拾芥抄

是延喜通寶此錢文を改鑄ふなり

日本紀畧云天徳二年三
月廿五日改錢貨文延喜

通寶為乾元大宝三月八日右大臣於仗座仰外記今因備介廣兼
圖書允阿保懷之令書新錢文但被用懷之文字様

和同開珍より乾元大宝より 太平と陶基
と二品除く 本朝十二錢といふ

冷泉帝より天皇の号止る皆院号となり鎌倉時代より

ハ三貨及鑄錢ハ沙汰なり日本紀略より後一條院寛仁元年

盗人前撰改家ハ倉町に入ると砂金千三百餘兩と盗取り

日本紀畧

六十二

の見えるるり小右記り長元二年九月前陸奥孝義志_ニ砂
 金十兩_ラ金粒太_ク不似_テ例金又此砂金異_ナ例金不可被充_テ用_セ
 雜事_トいへば當時と砂金と專_ラ通用ヤ_リあや例金といふ別
 小通用の金貨あり_しふや一説小太宝元年對馬嶋此貢金當
 時長元此貢銀と同じくせり_りか_と其金ハ金銀圖錄_ニ
 載_レる對馬高木握小判金形_ナ菜刀の如く津字高木ノ二
 字_トと刻_ルる物是_レなり是_レの_ニ例金_トと見え_グ_レ其_レ後
 高倉院安元元年六月小松重盛黄金三千兩と宋_レ育_イ
 王山_ノ贈_ラれ_しる_ヲ平家物語_ニ見え_ルり其_レ金貨_イう_ハは
 形_ナかり_しや治承二年十月十二日安德帝御誕生_ノの_レ金銭_ナ

九十九文を皇子の御枕_リ置_キる_ヲ平家物語_ニ見え_ル謹
 上泰山府君都狀_ニ銀錢二百四十貫文と朝野群載_ニ見え_ル
 此_レの_ニ金銀_ニ錢_トと專_ラ通用ヤ_リあや源平盛衰記_ニ
 治承二年砂金千兩南鐐百_トりり平家物語_ニ南鐐を煖造
 り作_リ東鑑_ニ南延_ニ作_リ砂石集_ニ軟_ニ挺_ニ作_カと皆同_ト
 其_レ形_ナ金銀圖錄_ニ多く載_セる_レど何_レと當時通用ヤ_リ
 か_ハ詳_カなる_レ又壽永小判金_トい_ハる_ニ壽永中造_ル所_トい_ハる_ニ
 形_ナ今の判金と同じく壽永二字と花押と刻_キヤ_リ重_サ
 五_匁 或_ハ云_フ北條泰時造_ルふ_ト 當時此等の宝貨通用_トい_ハ見え_ルり
 又其_レ以_テ異朝_ニ錢_モ來_ル舶_トい_ハる_ニ法曹至要抄_ニ建久

美濃漫録下巻 六二

四年、宣旨停止宋朝錢貨（今も世は多くあり嘉祐通宝）

治平熙寧元豊政和の類是

善隣国宝記元史を引く後宇多院

建治三年是異朝渡錢之始也（其は戦國）

大亂の世なり（あり）金銀も不自由（フビイウ）

承四年南都東大寺重衡（シゲヒラ）此兵火（カリ）不罹（カ）と再建此沙汰あり

建久の初、白河法皇より右大將頼朝（ヨリトモ）と俊乗坊重源（シニシヨウホウチヨウゲン）師

とよ其命ありしは頼朝（ヨリトモ）と朝金五十兩寄附（キフ）せしむと申（マカ）あり

ふ其年早魃（ハヤバツ）少く都合調（トウ）はざりし東鑑（トウカン）ふ見えたり其のら

北條時代ふる宝貨（ホウカ）此沙汰ハ見えず銅錢（ドウセン）を用ふるは東

鑑脱漏（トウロウ）り嘉祿二年先是（サキコト）以準布（ヨリテ）為幣（カネ）至此（ココ）又用（モト）銅

錢（カネ）とあり東鑑建長四年記り砂金百兩南延十兩とあり

ハ引續くと此等（コト）の宝貨を通用（トウヨウ）せしと見ゆ南北朝時代も

宝貨の沙汰ハ見えず金銀圖録（キンギンズ）大塔宮小判重（オウバ）四匁六

分太平小判金重（オウバ）三匁六分新田判官仁木頼明の造る所

赤松小判金重（オウバ）四匁壹分尊氏小判銀重（オウバ）四匁三分各其

圖と載（マ）りしはれ（レ）と當時此等（コト）の宝貨を通用（トウヨウ）せしむその

證（アタ）と見當（マ）らると室町殿時代も宝貨乃沙汰ハ見えど中原康

富記り應永八年五月十三日日本准三后道義書上（ル）大明皇

帝階下（ニ）云云（中）略金千兩馬千足（此千兩ハ砂金カクヤ）其餘（コト）も同書（ル）り

文安六年四月宣下（ル）砂金二十兩二裏（ツミ）といひ親長記（ル）ふ文

明五年十二月元服（ル）り砂金十兩但代二千匹（ト）といひ長興

記り文明七年四月宣下沙金一裏代二千疋と云はるら
 砂金を用ひしと云ゆ鹿苑院義満公ハ大小奢侈と好ま
 れ國家の金貨を磨削し應永四年ハ金閣寺を建られ同
 八年五月十三日大明の皇帝へ金千兩馬鎧劔刃種々乃
 品と贈らふ此皆皇國第一の宝貨を磨滅し神明守
 護ハ御徳と云ふと其弊改めざるなり其後太宗ハ
 壽爵を受られしあふ彼土を永樂通宝の錢を多く
 頒ち贈りて天野氏塩尻ハ應永十一年八月三日と記せり
 中正藏主一名仲芳の筆ありて本朝通鑑異稱日本傳五岳
 傳連珠集等より見ゆ義徳奢侈乃風世の子孫ハ流

傳し慈照院義政ハ世より殊更甚く天下ハ宝貨と
 融通と云ふ能ハど應仁文明の大乱も其より東山ハ
 銀閣寺を建られ文明十二年ハ世務を譲りて是ハ閑居
 と金閣より準し銀閣といハ其弊改亦りざるなり故ニ
 皇國神明ハ冥加なく寛正五年文明七年同十五年以
 上三度もと大明の天子ハ錢貨を賜ふたれと乞求
 らふ中と文明十五年ハ錢十萬貫と賜りて我國乃
 財用足す申さむと歎くはるなり我朝未曾有の大亂
 世ハ申さるる左程と云ふ困乏と云ふと宝貨の徳と輕む
 る冥罰ハヤゆるむ先是普光院義敬の時代ハ灰吹銀し

り物通用やふや永亨二年八月、紀小鈴鹿某云、灰
 吹銀五十目錢壹貫文、價也アツヒり金銀錢譜にえぎ
 小銀ハ灰吹少く耳薄くミ、ウス中厚く細長くえぎ此魚り似
 うる故小りよ其形ハいろいろ物少や金銀圖録小石州御
 藏、灰吹銀其種二三品を載セれど是ハ其時代より後世の
 物より蔭涼軒日録よ永亨十二年十月金三十三兩二分
 とりひ親元日記よ文明十一年時岡民部、丞預置金四十兩
 料足十貫とりつと義満大明へ贈らり千兩も同オク
 金貨なるや按てその小砂金一分とあかハ考謙紀小見えたるの
よく其餘砂金一分二分とあるハ未、見ゆよ室町
 時代小三十三兩二分とりひハ其後天文永録のヨシ大内義
 砂金なるよや覺束なり

興毛利元就石州を領り時銀貨を造らりしり石州
 銀山舊紀小見えたるよ圖録よ載セれり是ハ其私領
 のよ通用少く甲州金壹百三十六品越後小判諸國ハ
 金貨多く載セるよ天下一統公用の宝貨ハありよる
 かり其後元龜天正の頃金銀小幾枚とりよ名目ありよ圖
 録よ引用とるよ不多、見ゆ多門日記略よ元龜三年十二月
 信長衆變の時銀子百枚又云、天正二年十二月銀一枚代
 三石八斗の買、之ヲ同八年十二月金子一枚持上代同九年
 八月金子一枚代寺并此其後引續く二貨幾枚ハ唱ハ
 大閤記小金賦之事天正十三年初秋の頃金子五千枚銀

美濃の金一三巻

六十六

子三万枚諸侯太夫等は施しホドしマりト云云右元龜三年より天正年中ホドまシぐキ金銀は幾枚ホドもシ其宝貨ハ何れ乃世何人の造ホドりシといハるハ形ホド其因方何程といハるハ詳ホドまシるハ青木敦書ハ説又ハ圖録ハ彼此ホドと考證ホドしタれド皆後世ホドの臆斷ホドと確説ホドといハるハ武徳編年大判條ハ是ホドハ室町家ハ流例ありといハるハ信長以前室町の時代ホドと金幾枚と唱ホドへ來ホドると見ホドゆハ黄金を音ホドと呼ホドぶハ今ハ大判のホドなり是ホドハ信長の時ホドハ始ホドまりホドり

正親町院天正年中始テ鑄ル黄金大判金一名板金

是ハ織田信長公造ラりシ其形ハ圖録ハ載セるハ拾兩二字

并ニ後藤花押を刻キり

圖録ハ右天正大判金重四拾四匁大判ハ信長公乃時ハ始ル紳

書ハ後藤云ハ大判ハ拾兩ト書キるハ小判拾兩トハハ黄金拾兩ト黄金拾兩トハ昔ハ銀壹枚ト黄金壹兩ト銀拾枚ト黄金拾兩トハ大判壹枚ト銀四百二十匁ト通用セり又云ハ大判ハ信長公の時後藤の先祖ト極メるハ者ナりト板金ハ同書リ進退紀ハ引キるハ板金ハ幾クも殿中ハ披露ナり又進上モなリ私ニ居ス候ハ披露候ハ一枚二枚ト同前ハ候御前ハ包ト明ケ候ハるハ候ハ見エるハ是ハ則チ大判ハ權輿ト也ト云フ

按ズるハ板金の起リハ周礼職金の金ハ鉞ハ爾雅の鉞金

漢書武帝太始二年更ニ黄金ト師古註吉字金ハ提ノ之類小

判ハ夢溪筆談ハ小金鉞ハ東涯の名物六帖ハ載セる

より後人多く引書ヲ出シ種々の説ハあれドと盡ク漢土ハ

法ハ倣ヒて見エるハ甲州金ハ數十品ハありシもの多ク

ハ圓形なり

同天正年中鑄長大判金

是も重四拾四匁拾兩及後藤榮乘此花押あり圖録あり

出書方中太極二年更昔金調古鑄あり

同十五年鑄天正通寶

是錢二品あり一品泉彙小出

同十六年鑄大佛大判金

是ハ金銀錢鑄天正十六年造より重四拾三匁其面は延

目なく文字花押をかり圖録あり出時造らるゝとあり

は同名あり

又鑄讓葉大判金 又鑄小佛判

是ハ二品共に諸書鑄るる年と記さざり金銀圖品ハ讓葉

金大判或ハ大佛判より其形ハ圖録小出金銀吹替録あり

小佛判是を二條判より慶長以前より通用とす

後陽成院天正十九年鑄判金大小

是ハ武德編年より天正十九年此年關八品ハ通用や

をた為小後藤德乘并門人庄三郎光次より命ト黄金と

以て大小此形を定めて鑄さるゝが但大判を令目四拾八

文目を以て一枚とす是ハ室町將軍家の流例なり往古

より今より小判よりハ無く灰吹れ砂入と權衡ハ掛

鑄金圖品

と通用すといふと急勢をたぐひ今度先次ふ命ト昔
年よりありし金浅小四増倍の積り四文目八分を以て小判
とて是と辨て通用其便と得り金銭とて有り世に
行ひかると云く 五事略より天正十六年造黄金大判小判
とありされども圖録より天正十九年
とあり

天正文祿之間大間鑄大判金及圓歩判金

是ハ圖録より重サ三拾八匁二分天正文祿の間造る所なり
大間小判といふ又靜庵隨筆と引く大判は橋本といふ
極印ありあり大間の時此銀座より又大間圓歩判金乃
是を出し重サ壹匁二分と記せり 此外は大間但馬小判軍
用金銀二貨重サ六分及

花降金銀二貨等圖録に載るは
国家常用此物とも見えざるなり

文祿元年鑄文祿通寶

是、錢、泉、彙、よ、出

同四年鑄駿河小判金及武藏小判金

是ハ五事略より駿河判江戶判と皆々造れり 是を以て
稱さし物と云く紳書より後藤云、文祿四年江戶駿河
兩所より小判を定らる 駿河小判重サ四匁貳分五厘武藏
小判重サ四匁八分弱金小圖録より出

慶長年中鑄金壹分判

是ハ諸説ありと一決せし五事略より慶長四年始造
壹分判といふ紳書より後藤此説と引く慶長五年より

造りし金一

造りし武徳編年ハ慶長十年後藤庄三郎光次

に命ト金壹分判を始ト造りし其重目壹錢目

二分ありといふ常山紀談ハ後藤庄三郎黄金を四ツ

小切ト通用せしと望り今の一分金といふ夫ハ始

まり但甲列ハ信玄碁石金といふ所の一分金ハ碁石

金ハ倣やゆと云是等の諸説孰ハ是なりや其

黄金を四ツ小切トシテ靜庵隨筆ハ花小判トシハ

金子壹兩を四ツよト小判のやうな物なり壹分の大

なりト重サ壹匁二分其形ハ圖録ト出

録ハ露金と出此類
ナリト云る圓形なり

碁石金ハ甲陽
軍鑑ハ山ノ圖

同六年鑄判金大小抵銀豆板等而定法制

是ハ五事略ハトシテ慶長六年五月始ト通用金銀の法

を立トシ判金大小丁銀豆板等の制定

重ハ四拾貳匁二分拾兩、二字後藤榮乘花押を刻ト同並大

判金目方同ト但榮乘の花押變態ナリ江戸座小判金重

四匁八分壹兩、二字光次花押を刻ト京座駿河座二品文字

目方皆同ト、万兩頭小判ハ光次花押上下ト刻ト壹分判重

壹匁二分是ハ片本字兩、此時始ト銀座ト置キ、

其座ハ菊一文字夷一文字大黒極印等ト刻ト

ト調進ヤ、大黒極印ハ定ラハ其銀貨ト俗ト大

黒遣トシ、常是ハ乃テ其名ナリ、慶長丁銀ハ大抵目方

丁銀ハ大黒の形ト十二程刻テ、豆板ハ、按ビ、丁銀の起リ

真面トシ、字と刻ト裏ト大黒と刻ト

四拾三匁の内外ナリ大黒

漢上の銀錠又ハ錠銀ハ倣シテ造リ〜ハい説ハり金

と錠ハいハ通雅ニ見え金銀銅ヲを錠シ〜ハ後魏ノ崔浩ノ好シ

觀ル星變ヲ置キ金銀銅錠ヲ於テ酢器ト史ニ見え銀ハ千錠ト五代

史賈ハ辨ガ傳ニ見え銀錠ハ品字箋ト豆板ハ俗ニ小玉ト漢土ノ

小見え錠銀ト通鑑ニ釋ス文ヲ辨疑ス見ル碎銀又ハ散碎銀ト東涯ニ六帖ニ載ス

〜ハ後人多く引書ヲ出シ種々ノ説ハい〜ト是等モ

皆漢土ニ依リ倣シ〜ト見え〜ト是より以前ノ天文永録ニ

比石列銀山ニ始メ銀貨ヲ鑄ル公用丁銀ハ公用永祿ニ

其後ハ文祿二年ニ鑄ル丁銀重ハ四拾三匁ト石列銀文祿ニ

同年筑前博多丁銀ハ博多御公用文祿ニ中山ニ共ニ慶長ニ

同丁銀ハ四十三匁ノ内外常ニ其形ハ宛然ト〜ト相同ト〜ト小ハ

是と刻ス〜ト物

最初丁銀ヲ鑄ル〜ト時より今ニ形ヲ造リ〜トなり又碎銀ニ

も切使ハ〜ト諸説ハい〜ト彼土ニ豆板ハ似テ〜ト物ハいり

群談採餘ハ景泰上願ニ事ノ聲色奢侈ヲ嘗テ以テ銀豆金銀

物ヲ撒地ニ冷シ宮人及ヒ宦侍ヲ争ヒ拾テ爲シ開笑ト〜トい較耕録ニ

白金百星許ハ〜トい豆板ハ〜トい一説ニ豆板ハちり

〜トいハ重サ〜ト匁五分許ハ円形ニ〜ト面ハ矮雞ト此形ヲ鑄付〜ト京都

室町ノ養林庵ノ昔ハ數百粒ヲ蔵セり此寺ニ加藤清正ノ菩提

所ニ〜ト矮雞銀ハ朝鮮銀ナリ

同八年五月鑄ル慶長大判ナリ

是ハ金銀圖録ニ載ス〜ト丸ハ内ニ五曜星ノ紋ヲ慶長ハ

五月極六字ト分書シ〜ト壹兩用介花押ト〜ト刻ス

持察漫録下之卷

同十一年鑄慶長通寶

是ハ銅錢なり武徳編年ニ是歳永樂通寶を止薄錢

を用らるカ五事略ハ慶長十三年十一月止永樂錢用京錢

ト二説同トシテ後小松帝應永十年八月三日永樂錢と

京都將軍義滿ノ言上ト義滿下知シテ其錢を滿氣小シマ

シ其後北條氏康閑東ト領ヤリテ永樂錢の通用下知ト施

他錢多ク京地ト集メ京錢ト稱セリ一説ハ應永十八年八月

相列三崎ハ永樂錢積ミテ船漂著ト將軍義持の時ナリトモ

一説ハ當時永樂錢を重ト黃金ト米價ト皆永樂錢少ク定ム

黃金一枚トリハ七兩二分ナリ物の代附二千貫トリハ金五十枚

ト二百貫ハ五枚ナリ七兩二分ハ代銀四百五十拾目ナリ千石千貫

トリハハハハ永樂錢ナリ千足萬疋トリハ金一分ト百疋の積ナリ

當時永樂ト總トの擇ト強ク人々永樂ト好ク京錢ト惡ク毎爭

論ニ及故ニ制札ヲ要脚精撰ト書モ錢の擇トナク通用セヨ

とのるナリト此説ハ金錢枚トリハ室町時代ナリ稱ナリ

十一年来ハ永樂錢停止セラレ永樂常錢乃差別ナク同ト一

文の通用ナリ定リぬ

同十四年鑄大佛大判金

是ハ武徳編年ハ慶長十四年秀頼洛東大佛再興ナリ

秀吉聚斂の黃金千枚分銅を潰シ大佛資用の為小大判

後水尾帝元和元年鑄元和通寶

是錢四五品泉彙ナリ出

明正院寛永十三年鑄寛永通寶

是歲五月錢座免許此錢背文一丁の十六小丁の悉皆

泉彙り出

靈元院寛文八年鑄寛永通寶至天和三年

是錢京都太佛の像を毀て鑄り寛文より天和に

同きく十六年の間東府龜井戸村俗龜戸村うく鑄る泉

彙り出收錢是

貞享元年鑄貞享通寶

是ハ銀錢なり泉彙り出

東山院元禄八年改鑄判金大小板銀豆板等

是ハ元禄八年九月十日二貨を改鑄る世ハ是と元

字金銀といひ又元禄新金といひ判金大小共背ハ元

字を刻す江戸座京座小判及壹分判重皆慶長ハ制

小同ト此改鑄金大判ハ享保十年十二月朔日停止小判分判

同十年鑄ニ朱判金

是ハ元禄十年六月晦日新金を以てニ朱判を鑄る重ハ六

分圖録に此金宝永七年四月停止

同十六年正月鑄銀代通寶

是ハ伊勢屋道喜といひ者ハ願書納り一錢壹分五厘

の通用大ハ九分五厘重ハ壹匁六分鑄高百廿五貫文

辨察漫録下之巻

未^レ命令^レたり^レ試^ス鑄^ル泉彙^ニ出^ス

寶永三年新鑄銀貨

是^レ寶永三年六月六日新銀と以^テ拱銀豆板等^ト鑄^ル宝字極印ニ^ツと刻^ル常^ニ是^レ極印^ナ世^ニ是^レ以^テ

ニ^ツ寶銀^ト又^ニ宝永新銀^ト圖録^ニ出^ス此^レ銀享保七

同十年通用停止

同四年五月始^テ鑄^ル當^ニ十大錢^ニ寛永通宝

是^レハ一^匁十^匁り當^ル通用京七條^ナ鑄^ル此^レ制^ナ

漢土^ナあり^テ文獻通考^ニ宋^ノ崇寧二年^ニ令^シ陝西^ニ鑄^ル折

十大錢^ニ又^ニ崇寧監鑄^ル御書^ニ當^ニ十錢^ニ每錢^ニ重^ク三錢^ナ

り^テ此^レ錢^ハ同六年正月通用停止

泉彙

同七年三月改鑄^ル三^ツ宝銀貨

同四月二日改鑄^ル三^ツ宝銀貨

是^レハ宝永七年三月六日二^ツ宝銀^を改^メ鑄^ル兩頭^ナり^テ宝字^ハ

極印^中永^ノ字^ハ添^ヒ極印^を刻^ス世^ニ是^レ以^テ永^ノ字^ハ銀^ト以^テ

又^ニ中銀^ト拱銀豆板^共此^レ銀^ハ享保七年通用停止^又

同年四月二日三^ツ宝^と改^メ鑄^ル宝^ノ字^ハ極印^三を^ハ刻^ス世^ニ三^ツ

宝銀^ト以^テ此^レ銀^ハ享保七年通用停止^又同月十五日元^ノ字

金^と改^メ鑄^ル小判^壹分判^ト小形^ナ乾^ノ字^ハ刻^ス

泉貨

世は是れと乾字金とりのひ又乾金とりのひ小判重二匁五分壹
分判重六分二厘五毛圖録に此金享保五年停止
中御門院正徳元年改鑄四宝銀貨

是ハ正徳元年二月二日三寶銀を改鑄ふ宝字極印四ツと
刻と是れと世小四ッ宝銀とりのひ同年九月鑄所を廢一拵銀
豆板とりのひ此銀享保七年通用停止圖録に此

同四年五月改鑄二貨稱復古

是ハ正徳四年五月十五日金銀二貨慶長の法制古小復
改小判重四匁四分
八分分判ハ重壹匁二分添極印等なり是れと世は正徳新

大 金とりのひ佐渡のく鑄る佐字小判佐字壹分金はるる裏り
同 佐字を刻と拵銀豆板も慶長よか形に圖録に此

又是歳奉命鑄寛永通寶佐字錢至同六年十一月

是れと正徳甲午に命せられ同乙未十一月より佐渡國相
川あゝ寛永通寶佐字錢を鑄ふ此錢二品泉彙に此

享保元年鑄享保通寶

是錢背に永字と刻と泉彙に此

同三年十一月朔二貨有轉換通用之命

是ハ金銀引替の命あり乾字金百兩より上金五拾兩元ノ字
と同前なり寛年より五年と限りと新銀拾貫目より元

字銀十貳貫五百目と以て替る宝永銀八十六貫目中銀八
廿貫目三三寶ハ廿五貫目四三寶銀と四十貫目と以て替
同右此割合を以て來る寅年より五年に限引替る

同十年十二月朔鑄新金大判

是ハ元祿大判を止て慶長大判此法制に改鑄る重
四拾四匁花押ハ壽乘の判と刻て是と世に新金大判といふ
壹枚金七兩貳分此積り同十一年より亦鑄る今用る物是

かり圖録に

同十一年鑄寛永通宝仙字錢至同十七年同十三年是歲鑄
大錢

是ハ享保戊申より同壬子まで五年の間奥州仙臺石巻
仙字錢を鑄る又是歲撰州難波より大形の寛永
通宝を鑄る此錢金鉛銅の三品あり俱小泉彙に
櫻町院元文元年改鑄文字二貨且有轉換通用之命

是ハ元文元年五月十二日金銀を改鑄る小判重三匁五分
壹分判重ハ分七厘五毛文字此添極印を刻て是と世
に文字金銀といひ又文金銀といふ同年六月十五日より
引替始る其命ハ慶長金百兩代百兩乾字金二百兩代百
兩慶長新銀拾貫目代同ト文金改鑄此分ハ分判古金百
兩代文金百六拾五兩賜る古銀拾貫目代文銀拾五貫賜

ふとかり金百六分五兩銀... 同年鑄寛永通宝十字及小字銭

是ハ元文丙辰年命ひりく東府ニヶ所やく鑄る五月より

深川十万坪あく十字銭と鑄る十月より同所小梅村あく

小字銭を鑄る小字銭ハ銅鐵二品なり此銭泉彙小出

同二年鑄寛永通寶仙字及川字銭依字銭異品亦出乎其間

是ハ奥州仙臺石巻少く仙字新銭と鑄る享保中よ鑄る銭ハ異なり

又東府小名水川今うりだ少く川字銭と鑄る又佐字銭

異品とは是年前後小鑄る心徳中に鑄る銭ハ異なり二品泉彙小出

同五年有鑄銭之命寛保二年鑄寛永通寶元字銭又是歳

鑄足字銭

是ハ元文五年よ命ひりく寛保二年より元字銭と鑄る此時

大坂高津新地徳倉長右衛門別段の用座命ひり又是歳

下野国築田郡足尾村少く足字銭と鑄る泉彙小出

後櫻町院明和二年鑄五銭歩銀同三年歩銀通用有命

是ハ明和二年九月四日新小五匁銀貨と鑄る形南鐙の如

く表よ銀五匁裏よ常是二字と刻と此銀重ハ五匁三厘金

壹分よ銀三枚金壹兩よ銀拾貳枚の積なり同三年三月

此銀通用と命や心圖録小出

同五年鑄寛永通寶鎮鋤當四銭又是歳鑄長字銭及久

字銭

是ハ明和五年三ヶ所（長崎、肥前、肥後）鑄錢あり鎮銚（長崎）の四匁錢ハ東

府龜井戸村（肥前）鑄（是年五月晦日始行ハる錢背ハ波少ハ同六年秋以來鑄物アリ）

長字錢ハ肥前長崎（肥後）鑄（漢土ハ鎮銚錢ハ明孝宗帝）久字錢ハ常州三戸（肥前）

鑄（此錢ニ品泉彙ハ出）弘治十六年弘治通宝（鑄）

同九年鑄南鐐銀貳朱判

是ハ明和九年九月七日上銀南鐐（と以て）貳朱歩判（と鑄）

る重（二匁七分五厘）長（九分半）横（五分半）厚（八厘）表（以南）

鐐ハ斤換小判一兩の十字裏（銀座常是の四字）を

濺（オキ）と金銀錢譜（載）ふ南鐐異品二種（一種ハ今の南鐐）あり

同

の紋（一）より一種ハ表（ハ）以南（ナ）南鐐十六換（小判一兩）を

十字裏（銀座）二字（り）り（常是の二字）を

此が賀南鐐但馬南鐐菊桐南鐐（此類數品是と異なる）

按（ず）ふ南鐐ハ上（と）り（源平治承乃）り（り）

と圖録（載）ふ南鐐大判表（南鐐壹枚）と銘（と）

大重（四拾三匁）尊氏小判銀表（壹兩）と銘（と）重（四匁）三

分（此等銀貨乃）起（つ）後世の丁銀壹枚四拾三匁

板壹兩四匁三分（不定）ハ此南鐐銀の遺意（あり）む（録）

ハ爾雅（小白）金謂（之）銀其美者謂（之）鐐（あり）南ハ海篇

朝宗夷語（音釋）門（珍宝）銀南者（と）り（南ハ）離（み）明（る）

了詩小雅（以雅）以南（も）南夏文明（此方）銀ハ明白（あり）貴（と）

辨録

き物たるは事事物異名に銀の一名白貴しといひ白物といふ鏡の裏に南天燭と鑄付ると離乾二卦は象を明
白しとく貴しといひ為なり南方と火しとるハ明なり
故に銀の一名と朱攷しといひ行厨集に見えり南鐐ハ
明白しとく貴た銀といふなり

太上天皇天明四年奥州鑄仙臺通寶

是ハ擔乃鐵錢しとく仙臺地のと通用とを為り鑄し
は諸國に分散しとく今ハ通用せり西国しとくハ長崎れと通
用せり此錢泉彙り出

同八年四月南鐐銀有永代通用之命

是銀貨通用の便利最上といふなり

以上 我國に寶貨世に通用とす物 皇后新羅の役より
一千五六百年乃間其大略如此

諸國に寶山と追々にしけ其始末詳かざるも多し

○大和國より金銀と出す金峯山ハ金の峰しとく黄金出る
る宇治拾遺に見えり銀乃嵩ハ吉野山より將軍義
興の反やし所なり

○摂津國より金銀と出と元祿以前より出たりといふ摂州

○金津山ハ打出村乃北より阿保親王此山に金の瓦壹万
黄金一千枚と埋しとるといひ俗傳にありし日さし
入日めやく此下に金千枚

五万 圖録ノ撰津、国多由、鉸銀と載り

○甲斐、国より黄金と出と其、金坑ハ山梨郡黒川より
 ○神名式ハ甲斐、国山梨、郡金櫻、神社在、金峰山より其、
 其、金座ハ志村野、中山、下松木四家より其、古金ハ碓石令
 板、金大鼓判、細字、金延、金繩目、金等あり其、新金ハ甲
 ○安金、中金、甲重、金、甲定、金、等あり今、通用するハ壹、分、判
 貳、朱、判、壹、朱、判、朱、中、の、四、品、なり往、古、の、舊、制、に、因、り
 天、正、中、改、鑄、後、より今、不、至、り一、国、通、用、を、許、さ、し、圖、録、に、壹
 百、三、十、六、品、を、載、り

○近江、國より黄金と出す石部、驛より東よ入る金山村是古

の坑山其蹟猶存す今此通路を古の通路にあはせり

説小銅坑 圖録小近江、国戸笹小判金江津川桐小判金載り

○出羽、國より金銀を出す此、國々元明帝和銅五年九月小

陸奥國と割と始り

二郡を割と出羽國小隸り

大正年中より金と出せり見ゆ

圖録ハ出羽、国月山及赤西、小判、金、秋田、小判、金、亀田窪

田横手角館等の切銀或ハ佐竹花降銀等數品載り

○加賀、國より金銀を出す金坑ハ澤村山より圖録圖品

等ハ加賀、小判、金、梅鉢、小判、銀、花、降、銀、七、八、種、竿、銀、挺

銀切銀南鐮等數十品を載り

○越後国より金銀を出し是ハ謙信佐渡を領せしむ

其金山より採し物ありし圖録ハ越後国高田小判金圓小

判金越座小判金一名皆謙信小判長岡寛字切銀村上永字

銀及新泻ハカ榮字宝字志ろ切銀数千品載り

○佐渡国より金銀を出す其黄金出さるハ守治大納言物

語卷四載り此国ハ聖武帝天平十五年二月ハ佐渡を以て

越後小并ハカヤ孝謙帝天平勝宝四年十一月又置て国ト

ヤシのヤ拾芥抄に見えしハ越後の属國なり上枚謙

信佐渡と攻取し其金を採り年々国用と催せり大

閻秀吉公兼て此の國を謙信義子中納言景勝と

欺て奥州に移し其国を私領し金と採りて

金出せし程は豊やれ其後年々多くの砂銀と

出せり武徳編年ハ慶長九年八月十日大久保石見守長安伏見小至て其司牙の佐渡国の山兵砂銀を出せり

きと言ふと五年以前庚子より上枚景勝佐州と領せし時ハ僅ハ

砂銀出々か辛丑公領となり石見守按檢し壬寅年ハ出

るハ萬貫目

○但馬国より金銀を出し延喜式ハ對馬嶋江銀といふ

但るハ国司ハ此例ハ非し其比より銀ハ出せり圖録

ハ但馬国小判金小判銀南鐮小判但馬南鐮小玉銀

等數品載るる

○石見国より金銀と出す

金種類石州方言あり金鉄屎と
ツギに伴金石とテイシと

○銀多く出るふる銀山の名は

武徳編年慶長九年
八月十日は且石州銀

山と庚子まぐり毛利輝元領分の時ハ銀僅不出るが辛丑公領
しかり長安檢断し壬寅の年中砂銀出るの四千貫目ふ及る

○美作國より銀と出と作州真嶋郡神代は古の坑山其蹟

我存と番録は美作國二菊小判銀壹分銀載るる

此外は伊豆國より金銀と出する陸奥南部より黄金を

出する五事略は載セ圖録は各國の金銀數十品載るる

と其坑處及正據は記さず今ハ佐渡の令銀陸奥

石見の銀の多く出と又圖品圖録等ハ玩賞の金銀凡七十品

載るる國家通用の宝貨は記さず和銅ハ國史ハ

見えしより以來諸國ハ出る殊多し多田奥州南部同仙

臺越前紀伊伊豫日向備中美濃等より出す其中越前と

上品と是も鑄錢國京通用乃外弄錢繪錢等數百品の

孔方圖鑑珍貨百錢圖及錢範泉彙等ハ多く載るる

れは通用の宝貨は記さず

我國人皇の御代は千五六百年に間異朝より來り

宝貨と国土ハ掘出せし宝貨は其數廣大無量ゆく測

筭の及ふ所は金銀銅の三貨今日國家ハ

不足

不足

不足

と分つと見えざるハ七宝最上の物不消不滅の徳とあり
見と耗散磨滅とゆる多量のあり 耗散磨滅ハ大率

三不利りの第一ハ欽明帝の御代より佛氏舶來一代々
此帝王佛氏とる信一推古聖武二帝大佛と造つる

一如く佛道次第に行りて天下に宝貨佛氏の用とせしむ
十ハ七八是ハ一不利なり第二ハ貴賤上下皇統神明の大御

國ハ生れ古帝明王乃世無為無欲各長壽此風俗とせし
と奇珍異物と賞美一外國他域の品と尊び海舶互市よ

交易一天下の宝貨好奇の用とせしむ十に二三是ハ二の
不利なり第三ハ貴賤一統美麗華色と本一服佩器

物玩弄此品もと鏤刻泥薄ハ磨利一天下の宝貨
飾は用とせしむ十ハ一二是ハ三不利なり

不利と考制ありて我ハ東方ハ四大洲に長とせし寶貨
富有第一の國とる昔ハ宝貨を磨滅とせし制禁あり

續日本後紀ハ承和元年二月癸巳勅曰金銀薄泥用之
公私有費無益宜禁斷之しり漢土とて耗散磨滅の

るものとて一人數多あり其二つといふハ
宋方々泊宅編云東坡常怪今之黃金不若昔之多磨之

者衆也宜其小價貴也
草木子 卷四雜 前古黃金如王莽末年省中尚有六十餘

草木子 卷四雜 前古黃金如王莽末年省中尚有六十餘

万斤後世黄金絶少由其所耗之途廣也金一為箔無復再還元矣

謝肇淛文海披沙卷六黄金一種古多而今少漢高帝賜陳

平黄金至四萬斤梁考王没庫中黄金尚四十萬斤韓嫣

以金為彈董卓積金成塢而漢制天子每聘后輒用黄金

二萬斤今之大內豈易辨此所以然者世間糜費漸滅唯

金最多而四夷之外太不返者不與焉衣服之銷金縷金器

玩之鍍金鍍金鉤金鈇金篋扇之泥金灑金貼金神仙之

鋪金經典之乳金軸文之貼金天下廣一日殆以萬計皆磨

滅至盡間有銷鎔所得者一萬中之一二耳生之有限安

能副無窮之用哉考宋太宗時禁自中宮以下服玩皆不

得用金一切銷金貼金縷金間金戴金圈金解金剔金燃

金陷金明金泥金影金榜金闌金盤金織金金線皆不許

造安今日而一申明此禁也哉

謝肇淛がりよと今此地のく金貨と磨滅するふと一々

引合と見るるに外國は抄ぬく返さるの外無益のゆふ七宝

最上の物と磨滅するハ勿躰たるゆふのゆふ又彼がりよ知

天下の廣一日のく磨滅するの廣大なるハ終に寶貨と

盡に至るゝ宜かりとや金貨ハ地中不在くハ數千載ハ經る

程生長とる物や

天明四年筑前國那珂郡あく後漢光武帝金印と堀り出と是即委奴國王ハ印也方

七分八厘後漢の尺七寸七分と以て度るは
其長伸るる度量衡再編に載り

大洲は長とる宝貨第一の國なり諸國の宝山と一々封禪

一彼ハ金山此ハ銀山銅山と尊崇掘開とせしめ禁

永く地中小安置し不消不滅幾億萬歳と経ふ

日月と同じく仰ぎてはるる彼肥後國阿蘇山と明朝

より壽安鎮國山と稱美とるがごとくは人々自る宝

貨のそとにのみとめり聊も耗散磨滅の氣ハ起らざれば

ふに扱ふ一國家入用の節ハ何時も掘開し其

用と催りしむ其内に國家乃三不利と考制し無益

の用と省むハ國家所有の宝貨一天下と往來するも

聊も耗散磨滅ハたに理なり先三不利を制しは金

銀泥薄より始る時ハ人々磨滅とある不なり

此邦の金箔三寸四分四

方百枚重三分四厘許に四寸箔といふ佛師箔ハ箔の上

品なりまゝ大中小三種あり大ハ四寸方四寸中ハ三寸五分小ハ

三寸大ハ百枚重四分六厘種中ハ三分九厘小ハ二分七厘箔ヲ

製する金ハ上澄しといひ出紙といひ銀箔ハ百枚重七分許

其二貨を磨滅とせ天下の廣き推知とせ海舶互

市に費ハ五事略及於燒柴記り正保戊子より寶

永戊子まゝ六十年に大数と載り其外太宰乃

經濟錄にも寶貨の論ありと何れも耗散磨滅の不利と説き永く地中安置し

四大洲も長とる不消不滅の宝貨とて事と説す

茅窓漫録下

故小随筆一おくの

二巻

八十五月

茅窓漫録下終

茅窓漫録

二篇
近刻

全三冊

天保四年癸巳仲秋發兌

書肆

江都

岡田屋嘉七

浪花

秋田屋太右衛門

菱屋孫兵衛

皇都

著屋宗八

外屋利助

山城屋佐兵衛

金屋吉兵衛

橘屋嘉助

